リバース×烈火　仮面ライダークロスオーバー特別編　暴食の凶精

タスク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リバース×烈火　仮面ライダークロスオーバー特別編　暴食の凶精

【Ｎコード】
Ｎ３４０５Ｗ

【作者名】
タスク

【あらすじ】
精霊の力を借り、ガルドと呼ばれる怪物と戦う、烈火、烈風、烈氷、烈雷の四人の高校生仮面ライダー。ある日突然起こった謎の共鳴現象によって、四人は異世界へと呼ばれる。
そこは四人が見たこともない街、浜永市。この街を護る戦士、仮面ライダーリバースとの出会いは四人に何をもたらすのか。そして、四人をこの世界へ呼んだ者とは。

ジャード様著、仮面ライダー烈火と、拙作、仮面ライダーリバー

スのクロスオーバー作品です。

Chapter1（前書き）

アクセスして下さった皆様ありがとうございます。タスクです。

本作は拙作「仮面ライダーリバース」のクロスオーバー特別編のうちの一本。ジャード様著「仮面ライダー烈火」とのクロス作品です。作品の使用許可を下さったジャード様。誠にありがとうございます！しかし、機械音声の括弧をリバース式に統一とか、足のアタックチップを勝手に出すとか、第一話から好き放題やり過ぎて、コレジャナイレッカとか言われてしまうのではないかとビクビクしています。ですので先に言っておきます。申し訳ありません！！

ともあれ、お楽しみいただけましたら幸いに思います。

Chapter1

「く、ククク……ついに、ついに完成したぞッ！」
薄暗い部屋の中、大人でも抱えきれないほどに太いガラスの筒が淡く輝く。その外壁に縋りついているのは、脂で光る長髪を伸びるままにした白衣の男であった。
「忌々しい仮面ライダーめ……今こそ、今こそ復讐の時はきたッ！！」
男は眼鏡の奥の目に憎しみ、怒り、歓喜をないまぜにした輝きを渦巻かせ、ガラス筒の表面を両手で愛おしげに撫でていく。
「とうとう完成したのか」
「おお、ちょうどいい所に来てくれた！　兄弟よ」
不意に背後から響いた声に、カプセルに縋りついていた男は、唇の両端を吊り上げて振り返る。男が兄弟と呼んだ人物は、身だしなみが整っているという違いはあるものの、その呼び名通り、男と瓜二つの科学者然とした男であった。
「なるほど、兄弟か……さすがは私であって私でない存在。面白いことを言う」
呟き、後から現れた男は、双子のように似た男の隣に並び立つ。そして、部屋に散乱する資料や機材をうっすらと照らす唯一の光源であるカプセル、いや、その奥に浮かぶ影へ目を向ける。
「これが完成したモノか……面白い。やはり数ある世界の中でも、キミに協力を持ちかけたのは正解だったようだ」
その言葉に、くたびれた方の男は含み笑いを漏らす。
「フフ……こいつを完成させることが出来たのはキミのおかげだ」
そうしてくたびれた男は一際深い笑みを浮かべ、再び自信作の収まったカプセルの外壁を撫でる。
「フフフ。こいつの手によって、憎き仮面ライダー……リバースが滅びるのが目に浮かぶようだ。フフフ、フハハ、ハハハハハハッ

！！」
眼鏡の奥の目をぎらつかせ、声を上げて笑う男。そんな瓜二つの男を尻目に、後から現れた方の男も口の端を吊り上げる。
「私が提供した実験体も、存分に使ってくれたまえ」

「きゃあああッ！？」
「く、く、クジラが……歩いてやがるッ！？」
「に、逃げろォオオッ！」
爆音と悲鳴の巻き起こる四ノ上町の一角。逃げ惑う人々の中心に、二階建ての建物をも見下ろすほどの黒い巨体が立っている。
大きく丸みを帯びた体を前のめりに傾け、太い両足とTの字を描いて広がる尾が巨体を支える。その姿はまさに歩くクジラであった。
アスファルトに亀裂を入れ、人々を追い立てるクジラの怪物。その目の前に、人々を掻い潜って一人の少年が飛び出す。
「やいコラデカブツ！！　この俺が来たからにゃあ、これ以上テメェの好きにはさせねぇぞッ！！」
ツンツンと逆立った短い黒髪に、襟の開いた学ラン。そんな姿の少年は、巨大な怪物を真正面から指さし怒鳴りつける。
「行くぜッ！　爪雷（そうらい）ッ！！」
叫び左側を見る少年。だがそこにいた、宙に浮かぶ３０？ほどの小さな虎の口から出たのは了解の返事ではなかった。
『おいコラ海斗（かいと）！？　前見ろッ！？』
「へ……？」
小さな虎、爪雷の声に、少年、小野川海斗が間の抜けた声を出しながら前を見る。
「のぉわぁあああああああッ！？！」
するとそこには、アスファルトを踏み込もうとする、大木のように太い脚があった。
「おぎゃんッ！？！」

『海斗ォォォッ！？』
眼前の路面に突き刺さった踏み込みの衝撃で吹き飛ぶ海斗と爪雷。
「何やってんだ、あのバカ」
それを呆れ交じりの半眼で眺めながら、同じ学ラン姿の少年が前に出る。適当に束ねられた長髪頭の右横には、炎を纏った小さな赤い鳥が羽ばたいている。
『あの様子ならいつも通り、大したことはないだろ。それよりもガルドだ、悠樹！』
「ああ！　あのクジラヤロウの好きにはさせねえ、行くぜ翔炎！」
長髪の少年、波賀悠樹に応えるように、火の鳥、翔炎は輝きを放つ。そして赤い光の中から現れた、赤いバックルを悠樹は右手で受け止める。
悠樹は右半分の欠けた「火」の一字が刻まれたそれを腰に押し当てる。するとバックルの両端から炎が腰に巻き付くように走る。炎が散って現れるベルト。悠樹はその左腰にある円形のホルダーから一枚のＩＣチップ、ソウルチップを取り出し、バックルの左側へセット。
《Ｓｙｓｔｅｍ　ｌｏａｄｉｎｇ……ｓｔａｎｄｂｙ》
周囲に響き渡る無機質な電子音声。同時に悠樹の手はバックルのスライドカバーへ伸びる。
「変身！」
続いて悠樹は叫びながらバックルのカバーを右へ引く。
《Ｌｏａｄ　Ｕｐ》
再び響く電子音声に続き、悠樹の眼前にベルトに現れたものと同じ、赤い「火」の文字が投影される。その火の字が拡散し、赤いエネルギー球となって悠樹を包み込む。そこへ振り下ろされる怪物クジラ、ガルド・ホエールの右足。
真紅のエネルギー球に包まれた悠樹はそれを横っ跳びにかわす。そしてアスファルトを踏み砕く轟音が響く中、着地と同時に自身も右拳を路面へと叩き付ける。瞬間、悠樹を包んでいたエネルギー球

が足元、否、地に突き立てた拳から燃え上がる。
羽ばたくように舞上がった炎の中から現れたのは真紅の戦士。
黒いボディスーツに重なる赤い鎧。猛禽の頭を思わせる赤い仮面。そして輝く大きな黄色の目。
その名は朱雀の力を宿した戦士、仮面ライダー烈火。
烈火は地に右手を突いた姿勢のまま、左手で左腰のチップホルダーから一枚のチップを取り出す。そして左手に持ったそれを、右腕の装甲のリーダーへセットする。
《Ｗｅａｐｏｎ……Ｈｅａｔ　Ｓａｂｅｒ》
電子音声と共に、烈火の地に突いた右拳から炎が噴き出す。握り手から噴き出す形で伸びる炎を振り、ガルド・ホエールの足を切り上げる。
「ゴアアアッ！？」
足を焼き切られた痛みに声を上げるガルド。その様子を見ながら、烈火は炎の中から現れた赤い刀身の長剣を顔の横から視線に沿って突き出す形で構える。
『このダメージ、奴は風属性か』
「なら一気に畳みかけるか」
ベルトとなって一体化した翔炎に答える烈火。そして傷に沿って炎がくすぶり続けるガルドの太い足目がけ、炎の剣、ヒートセイバーを両手持ちにして振り下ろす。
「オラ、オラァッ！！」
袈裟掛け、横一文字、さらに左逆袈裟と連続で斬撃を見舞う。熱を帯びた刃が走る度に、黒い表皮を炎が侵す。
「ゴォアアアアッ！？」
更に斬撃を続けようと振りかぶる烈火。そこへ怒りを含んだ咆哮と共に、切りつけられていた足が振るわれる。
「うおっとぉッ」
自身を払いのけようとする一撃に烈火はとっさに飛び退く。そして着地に続けて剣を右手で回して持ち直す。

「さすがにタフだな。あの図体は伊達じゃねぇってことか」
こちらを睨み、恨めしげに唸るガルド・ホエールを眺めて一人呟く烈火。するとその隣に一人のセーラー服姿の少女が走り出る。
「手こずっているようではないか、悠樹君？」
青みがかったセミロングの髪の少女は、ウィンク交じりに烈火に声をかける。
「霞河、避難誘導は終わったのかよ」
「完了したから来たのだよ。じゃあ行くよ、風牙（ふうが）！」
『承知した、舞！』
その鋭い声と共に少女、霞河舞の傍らに、風牙と呼ばれた１ｍほどの緑の竜が現れて輝きだす。そして舞は風牙の変化した翠色のバックルを腰に当てる。直後、小さな竜巻が腰を包むように巻き起こり、ベルトに変わる。
《Ｓｙｓｔｅｍ　ｌｏａｄｉｎｇ……ｓｔａｎｄｂｙ》
セットされたソウルチップを読み込むベルト。
「変身」
《Ｌｏａｄ　Ｕｐ》
掛け声と共にバックルのカバーをスライドさせる舞。その目前に「風」の一字が現れるのに続き、それが霧散して翠色のエネルギーが彼女を包み込む。
球体状のエネルギーの中で、黒いボディスーツを纏った舞は右手を右から左へ扇ぐ。それに伴って生じた竜巻がエネルギー球を吹き飛ばす。
渦巻く風の中から現れる緑の戦士。
しなやかな翠色の装甲。それと同じ色をした龍の顔を模した仮面には赤い目が輝く。
青龍の力を宿した戦士、仮面ライダー烈風。
「ゴアアアアッ！！」
変身を終えた瞬間、ガルド・ホエールの口から竜巻が放たれる。渦を巻き迫るそれを、二人は左右に散ってかわす。

散開した二人の内、ガルドは烈火を追って顔を動かす。
「狙いはやっぱ俺かよ！？」
『まあそうなるだろうな』
いやに冷静な翔炎の声が響く中、烈火は真後ろに迫った空気弾を横に飛んでかわし、着地点を狙った弾丸を炎の刃で切り払う。
《Ｗｅａｐｏｎ……Ｃｙｃｌｏｎｅ　Ｓｈｏｔ》
「私の方に引きつけてみるから、それまで頑張ってね！」
烈風はそう言って、チップで呼び出した銃の引き金を引く。立て続けに放たれる弾丸がガルドの体を穿ち火花を散らす。
「ゴォガアアアッ！！」
烈風からの銃撃に、尾を振り回して応戦するガルド。
「甘いのだよッ！」
だが烈風は横薙ぎの一撃を跳び越え、手近な建物の壁を蹴って宙を舞う。そして空中で身を捻り、両手で持ったサイクロンショットをガルドの眼球へ向けて引き金を引く。
「グゥオオオオオオオオッ！？」
右目を潰され、その痛みに足を踏みならして悶えるガルド・ホエール。
「うぉわッ！？　危ね！？」
滅茶苦茶に振り回される尾を潜りぬける烈火。そこへ真直ぐなダークブラウンの髪を風圧に流しながら、大人しげな顔をした少年が出てくる。
「うわぁ……またでっかいね。今日のガルドは」
「渉！　奴の属性は風だ。無茶すんなよ？」
烈火の言葉に、大人しげな少年、秋元渉は頷く。そして傍らに浮かぶ水色の亀、氷甲へ目配せをする。すると氷甲は無言でその身を輝かせ、バックルへと姿を変える。渉はそれを手にとって腰へ当てる。
《Ｓｙｓｔｅｍ　ｌｏａｄｉｎｇ……ｓｔａｎｄｂｙ》
腰に巻き付いた氷から変化するベルト。続けて装填されたソウル

チップを読んでベルトから電子音声が漏れる。
「変身」
《Ｌｏａｄ　Ｕｐ》
電子音声と共に青い「氷」の一字が渉の目の前に現れる。それは溶けるように広がり、エネルギーの幕となって少年の身を包み込む。
その中で渉は右掌を突き出す。するとそこから冷気が広がり、エネルギー球その物が凍りついて行く。
砕け散る氷の中から現れた姿は、烈火、烈風よりも重厚な水色の装甲。オレンジ色に輝く目を持つ、水色の亀を模した頭。
玄武の力を宿した戦士、仮面ライダー烈氷。
「分かってるよ波賀君」
そう言って烈氷は、こちらへ飛来する瓦礫を見据えながら、右腕部のリーダーにチップを差し込む。
《Ｉｃｅ　Ｔｏｗｅｒ》
電子音と共に右掌で路面を叩く烈氷。直後、氷の柱が路面から伸びて烈火と烈氷に迫る瓦礫を阻む。
「僕はサポートに集中するから、仕留めるのは任せるよ」
烈氷は言いながら、続けて別のチップを右腕にセットする。
《Ｗｅａｐｏｎ……Ｉｃｅ　Ｈａｌｂｅｒｄ》
そして現れた棒状の氷を掴み、それが変化した矛槍を構えて駆け出す。
避けきれない瓦礫を叩き落としながら走る烈氷の背を見送り、烈火もまた飛び交う瓦礫を右へ左へ潜って走り出す。
ガルドの目が潰れた側へ潜り込むと、両足で地を踏みしめて跳躍する。
「おぉらぁああッ！！」
そしてガルドの頭上を跳び越えると、大上段に振りかぶったヒートセイバーを逆手に持ち替え、裂帛の気合と共に突き立てる。
「ゴァアオオオオオオオッ！？！」
突き刺さった赤い刃から炎が噴き上がり、その熱と痛みに頭を振

るガルド・ホエール。
「く、おお！？　大人しく、しやがれってのッ！」
剣の柄を両手で握りしめ、振り落とされまいと踏ん張る烈火。そこでガルドは、一度頭を深く沈め、一気に振り上げる。
「おおわっとぉ！？」
その勢いに手が滑り、真上に放りだされる烈火。だが烈火は空中で身を捻ると、ガルドの頭に突き刺さったままのヒートセイバーを見据えたまま、左腰から一枚のチップを取り出す。
「こいつで！」
《Ｗｅａｐｏｎ……Ｔｗｉｎ　Ｂｌａｄｅｓ》
その電子音に続き、炎となって燃え上がるヒートセイバー。それを両手で掴み、烈火はハの字を描くように炎を握った両手を振り下ろす。
左右に分かれた炎は、それぞれヒートセイバーよりも刃渡りの短い一対の双剣ツインブレイズへと変わる。
「オラオラオラァッ！！」
落下しながら右左と交互に絶え間なく炎の刃を振るい、ガルドの表皮を焼き斬り続ける烈火。そこで烈火は、ガルドの傷から炎とは違う赤い光が放たれるのを見つけた。
「アレはッ！？」
「ゴォアアアアッ！！」
「うぐあッ！？」
しかしその瞬間、ガルドが痛みのままによじった体に、烈火は押し飛ばされる。赤い双剣が手から離れ、炎となって散る。直後、背中から衝撃が突き抜ける。
「ガッ！？」
肺から空気が押し出され、同時に苦悶の声が漏れ出る。
アスファルトの地面から黒い巨体を仰ぎ見る烈火。それとこちらを怒りの目で見下ろすガルドの視線とがぶつかる。
「や、やべ……！」

『おい！　急げ悠樹！』
踏みつぶそうと迫るガルド。対して両手で体を支え、起き上がろうとする烈火。
そして烈火の視界が、大きく振り上げられた巨大な足の裏で塗りつぶされる。
《Ｈｏｍｉｎｇ　Ｓｈｏｔ》
《Ｉｃｅ　Ｓｈｏｔ》
「ゴアアッ！？」
だがその刹那、激しい銃撃音が鳴り響き、巨大な足の影が視界から退く。開けた視界の中、不規則な軌道を描くエネルギー弾と氷の飛礫でガルド・ホエールを牽制する烈風と烈氷の姿が映る。
『助かったな』
「ああ……サンキュー、霞河、渉」
窮地から救ってくれた仲間たちに礼を言いながら立ち上がる烈火。すると背後から葉が擦れ、枝の折れる様な音が鳴る。それに振り向けば、道路沿いの植え込みから生えた学生服のズボンとスニーカーの足が見えた。
「ドちくしょおぉぉいッ！！」
そんな叫びと共に植え込みから身を起こしたのは、ツンツン頭から折れた枝葉を生やした海斗であった。その姿を見て、烈火は軽く肩をすくめる。
「なんだ、やっぱ無事だったか」
その烈火の言葉に、海斗は烈火を指さし、歯を剥いて地団駄を踏む。
「波賀ぁッ！？　テメ、見てたんなら助けろよォォォッ！？」
喚き立てる海斗に対し、烈火は気だるげに首を傾けて溜息をつく。
「どうせいつも通りピンピンしてるし時間の無駄」
「てンめえェェェッ！！　今日こそぜってぇはっ倒す！！」
両足を激しく踏みならし、両手で頭を掻き毟ってヒートアップする海斗。その腹に黄色い塊が突き刺さる。

「あぶふうッ！？」
鳩尾を襲う不意の衝撃に、腹を抱えて膝をつく海斗。その目の前に、鳩尾を撃ったものの正体、爪雷が飛び出す。
『アホか海斗ッ！　そんなことより変身しろ！　このままじゃ何もせずに終わりだろうがッ！？』
爪雷に怒鳴られ、弾かれたように顔を上げる海斗。その顔はまるで先程受けた痛みを忘れているかのようであった。
「そいつはヤベェェェェッ！！　急ぐぜ、爪雷ッ！！」
『だからそう言ってるだろうがァァァッ！！』
言いつつも光を放ち、黄色いバックルへと姿を変える爪雷。海斗はそれを腰に当てる。すると黄色い雷が腰に巻き付き、ベルトへと変わる。
《Ｓｙｓｔｅｍ　ｌｏａｄｉｎｇ……ｓｔａｎｄｂｙ》
「変ッ身ッ！！」
《Ｌｏａｄ　Ｕｐ》
力を込めすぎた掛け声と共に、黄色い「雷」の一字が現れ、エネルギー球となって海斗を包む。
勢い良く右手を掲げる海斗。その右手から落雷が降るかのように全身を包み込む。
散りきらぬ雷を纏って現れる戦士。その装甲は輝くような黄色。虎の頭を模したその顔には青く大きな目が輝く。
白虎の力を宿した戦士、仮面ライダー烈雷。
「行くぜ行くぜぇぇぇぇぇッ！！」
変身した勢いのままに駆け出す烈雷。その手には一枚のチップが握られている。
《Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｓｔｒｉｋｅ》
「おぉりゃあああああッ！！」
チップを装填した烈雷の右腕から雷電が迸る。そして突撃の勢いを乗せて踏み切り、ガルドの太い右足へ、雷を纏った拳を飛びこみざまに叩き込む。

「ゴアアアアアッ！？」
向う脛へ打ち込まれた一撃に苦悶の咆哮を上げるガルド。それを見上げ、右ひじの内側を左手で叩く烈雷。
「どうだデカブツ！？　俺のクライマックス級のパンチはッ！？」
そんな烈雷の頭上に、足という支えの崩れた巨体が降ってくる。
「ちょ、ま！？　のぉわあああああッ！？」
視界を埋め尽くす巨大な影に絶叫する烈雷。とっさに腕を上に出し、頭上から迫る巨体を支える。
「の、ごおお……ッ！？　つ、ぶ、されて、たまるかぁあああああッ！？」
『踏ん張れェ海斗ォッ！！　男を見せろォッ！！』
腕と脚を震わせながら、ガルド・ホエールの巨体と地面の間で潰されまいと踏ん張る烈雷。
それを見て烈火は、烈風、烈氷と目配せして頷きあう。
まずは烈氷がホルダーからチップを取り出す。
「じゃあ僕から、二人とも。トドメは頼むよ」
《Ｉｃｅ　Ｔｏｗｅｒ》
そして烈氷がチップを装填するや否や、ガルド・ホエールの足元から氷の柱が立ち上り、周囲を凍てつかせて行く。
「ぎゃあああああああッ！？　ちょ、おま！　渉ゥッ！？　また俺を巻き込んでるっつぅぅのぉぉッ！？」
氷の柱に囲まれ、冷気の渦に閉じ込められて行く烈雷。
しかし三人はそれをどこ吹く風と、ガルドへのトドメの準備を着々と進める。
「では決めようではないか、悠樹君」
そう言って、銃を片手に翠色の龍の顔を模したマークのあるチップを取り出して見せる烈風。対する烈火も、翼を広げる赤い鳥のマークが刻まれたチップを左手で摘んで見えるように示す。
「ああ！　行くぞ霞河」
そして烈風は銃に、烈火は足のリーダーへチップを差し込む。

《Ｆｉｎａｌ　ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｐｐｕ》
《Ｆｉｎａｌ　ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｃｃａ》
「ハアッ！！」
重なり合った電子音声に続き、揃って跳躍する赤のライダーと翠のライダー。
その瞬間、ガルドが自身を拘束する氷を砕き振り払う。だが自由を得た刹那、その手足は竜巻に包まれる。まるで龍が巻き付いたかのような竜巻は、巨大なクジラの自由を再び奪う。
もがくガルド。その額の傷目がけ、烈風は翠色に輝く銃を向ける。
「ハァアアッ！！」
気合の声と共に放たれる太い翠色の光。避けることもできずに真正面から直撃を受けるガルド。その砲撃によりガルドの額の肉が吹き飛び、その内にある脈動する赤い核が露わになる。
「悠樹君ッ！！」
『行けえ！　悠樹ッ！』
「おおおおおおおおおッ！！？」
烈風と翔炎の声が響くや否や、烈火は雄叫びと共にその背から炎の翼を生やす。そして翼を羽ばたかせ、勢いのままに燃え盛る蹴り足を突き出して急降下。炎の蹴り、飛翔炎烈打は脈動する核を踏み砕き、亀裂から広がる火炎がガルドを内側から焼きつくす。
「ゴォアガァアアアアアアアアッ！？！」
炎に包まれ、大気を揺るがすような咆哮を上げるガルド。やがて一際強い炎が噴き上がり、周囲に熱気を振りまく。その刹那、中と外から炎に包まれたその巨体が爆散する。
轟音と風が爆ぜる中、ひらりと舗装された道路へ降り立つ烈火。
「ふう……今回も何とかなったか」
『上出来だ、悠樹』
赤い鳥を模した仮面の上から汗を拭う仕草をする烈火。そこへ烈風、烈氷が駆け寄ってくる。
「おっ疲れぇ、悠樹君」

「いやあ、毎回これくらいで終わってくれるといいんだけどね」
朗らかに労いの言葉をかけてくる烈風と、首に手を添え左右に揺らす烈氷。
「おいコラお前らぁあああああッ！？」
不意に響いた怒声に三人が揃って振り向く。すると黄色の装甲に焦げ付きと埃をつけた烈雷の姿があった。
「あ、やっぱり無事だったか」
「タフだよねぇ小野川君」
「タフさをとったらバカしか残らないしね」
三人がそう言うと、烈雷がこちらへ走りだす。だがその途中、瓦礫も何もない場所で躓いて転ぶ。
「あばっ！？」
舗装された路面へ顔面を叩き付ける烈雷。しかし、すぐさま身を起こすと再び三人に向けて走り出す。
「ちょっとは俺の心配をしてくれてもいいんじゃねッ！？　俺下敷きになりそうになってたんだけどォォォォッ！？」
目の前の仲間たちへ、泣き声交じりに訴える烈雷。だが三人のライダーたちは、右足で路面を踏みつけ続ける烈雷に対し、一度顔を見合わせて、軽く肩をすくませる。そんな仲間たちの反応に烈雷は激しく頭を振る。
「オイィィッ！？　何その反応ォォォォォッ！？」
喚き、仮面越しに頭を掻き毟る烈雷。そして一度言葉を切ると、烈氷を指さし再び声を上げる。
「大体渉ぅぅぅッ！　なんでこう俺を巻き込んで攻撃すんのッ！？　死ぬかと思うんだけどぉッ！？」
「君に良きクライマックスが訪れますようにってね」
「やっぱり死ねってことかよぉぉぉぉッ！？」
泣き声で叫ぶ烈雷。ふとその拍子にその体が輝きを放ち始める。
「なに！？　俺の悲しみと怒りで未知なるパワーがッ！？」
輝く自身の体を見下ろし、期待半分の声を上げる烈雷。

『ンなわけねえだろッ！？　こいつはッ！』
爪雷の怒声に続き、烈火、烈風、烈氷の体も輝き始める。
「これってまさか！」
「世界移動の力？」
輝く自分たちを交互に見やり、驚きの声を上げる烈風、烈氷。四人の放つ輝きは、やがて共鳴するかのように連動を始める。
「またどっかに飛ばされるのかよッ！？」
『この気配は……精霊ッ！？　しかし、こんな波長を持つ種族を俺は知らないッ！？』
声を上げる烈火に続き、翔炎が覚えのない気配に動揺する。
『バカな……ッ！？　我々と麒麟とも違う精霊族などいる筈が！？』
『お、おい！　ヤベェぞッ！？　共鳴が抑えられねぇ！！』
『……引っ張られる……』
風牙、爪雷、氷甲の声が響くや否や、光が四人の体から一斉に溢れ出す。

「……う、うう……」
痛む頭を押さえて顔を上げる悠樹。周囲の景色はさっきまでいた四ノ上の街中ではなく、赤い橋が近くに見える見覚えのない川辺であった。
『大丈夫か、悠樹？』
目の前に現れた火の鳥、翔炎からの問いに、悠樹は顎を引いて頷く。
「ああ……いきなり知らない場所ってことは、また異世界かよ？」
そこまで言って悠樹は、弾かれたように顔を上げ、顔を上体ごと左右に振って周囲を見回す。
「そうだ、皆は！？　また別々の世界に飛ばされたのかッ！？」
対して翔炎は顔を空に向け、落ち着いた声音で返す。
『いや、風牙に氷甲……あと爪雷の気配を感じる。場所はともかく

同じ世界にはいるようだ。しかし、あの妙な気配も……？』
潮を含んだ川風の吹く中、険しい目で周囲を見渡す翔炎。
「とにかく、みんなこの世界に居るなら探して合流しようぜ」
そう言ってズボンや学ランの埃を払いながら立ち上がる悠樹。直後、翔炎が目を見開いて嘴を開く。
『悠樹ッ！　後ろッ！？』
「はあ！？」
唐突な相棒の言葉に振り返る悠樹。その視界に黒い影がよぎった瞬間、悠樹は前方に飛び込み逃げる。
「ジジジジジジッ！！」
「ガルドッ！？」
けたたましい鳴き声を上げる蝉のガルド、ガルド・シケーダを振り仰ぎ、揃って声を上げる悠樹と翔炎。そこへ黒い右腕が振り下ろされる。
「うおわッ！？」
その一撃を、辛うじて横へ転がりかわす悠樹。
『悠樹、変身だッ！』
「ああ！」
そして悠樹は敵を正面に見据えると、烈火へ変身するため、赤く輝く翔炎へと手を伸ばす。
しかしそこで、空を裂くような鋭いエンジン音が鳴り響く。次の瞬間、横合から突っ込んできた黒い影にガルド・シケーダの体が撥ね飛ばされる。
「なぁッ！？」
突然の乱入者に驚きの声を上げる悠樹。驚きを顔に浮かべたまま、ガルドを撥ねた黒い影を目で追う。その先には、前輪を軸に後輪で砂地を削りながら停車する、赤い目のようなヘッドライトを輝かせるスポーツタイプの大型バイク。それと、それに前のめりに跨るフルフェイスヘルメットを被った男がいた。
男はメットを脱ぎ、手に持ったそれをバイクのハンドルに引っ掛

ける。そして自身の撥ねた怪物と、悠樹との間を阻むように地を踏みしめる。
降り立ったのは、整った顔立ちの若い男。歳は二十代前半。無造作に流した黒い髪。やや太めの眉とその下で怪物を見据える目からは不屈の意思が感じられる。背は悠樹よりも１０センチ弱高いだろうか。羽織った緑のジャケットの背には片翼の鳥が翼を広げている。
緑のジャケットの男は顔の右半分だけで悠樹を見て、柔らかな笑みを浮かべた。

黒い蝉怪人と対峙した男、伊吹健は、よろよろと立ち上がる蝉怪人に注意を払いながら、後ろからこちらを呆然と見る少年を一瞥する。
不思議な赤い鳥を手に乗せ、長い髪を適当にくくった学ラン姿の少年。目を剥き、口を開けてこちらを見ているが、目立った外傷はない。そのことに健は安堵に笑みを浮かべた。
『化物に襲われたんだ。無理もない……とにかく、彼を無事に逃がさないと！』
「キミ、ここは俺に任せて、早く逃げるんだ！」
呆けた少年を逃がす為、健は声をかける。すると少年は固めていた顔を動かして頭を振る。
「い、いや！　そいつは俺を狙って……ッ！」
「ジジジッ！！」
少年の言葉を遮り、鳴き声を上げて躍りかかってくる蝉怪人。それを健は両手で右へ受け流し、脇腹へ左膝を叩き込む。
「セェア！！」
「ジジッ！？」
その一撃に鳴き、裏拳の形で腕を振り上げる蝉怪人。それを健は上体を反らしてかわす。そこへさらに立て続けに突き出される左腕。しかし健は逆にそれを掴んで抱え込み、肘、肩と関節を極めて締め

上げる。
「ジジィッ！？」
驚きを含んだ鳴き声を上げる蝉怪人。その膝裏を踏みつけ、健は更に力を込めて怪人に問い詰める。
「近頃街を騒がせる黒い怪人……お前たちの目的はなんだ！？　何故人々を襲うッ！？」
だがその健の問いに、怪人は力を込めて強引に健の体を振り上げる。
「ハッ！？」
だが健は、自身を投げ飛ばそうとする怪人の力に乗って跳躍。空中で身を捻って着地する。そこを目がけ振り下ろされる爪。それをとっさに飛び退いてかわし、立て続けに突き出される爪の連撃を左右の掌で捌く。そして大振りの一撃を潜り避け、カウンターの左踵で蹴り抜く。
「フゥゥゥゥ……！」
蹴りを受け、後ろへ飛ぶ蝉怪人。健はその姿を睨み、鋭く息を吐く。
「問答無用か。あるいは言葉が通じないのか……」
仰向けに倒れた怪人と、少年たちを交互に一瞥し、呟く健。
「ガルドの攻撃を捌いてやがる……！？」
『そんなバカなッ！？　普通の人間がッ！？』
『あの赤い鳥……今！？』
少年の連れている赤い鳥の物らしき声に、健は眉根を寄せる。だが、すぐに視線を怪人へ戻すと、ジャケットからT字型にバックルの組み合わさった新リバースドライバーを取り出す。
「とにかく、やるしかないか……ッ！！」
そう言って健はドライバーを腰に取りつける。ベルトが伸び、正面と左腰にバックルが固定される。それに続いて左腕を腰だめに、右腕でV字を描き、音が鳴るほどに握り固めた右拳を左頬に添える。
「変……」

そこから右腕を腰だめに、左腕を右斜め上に伸ばす。低い声を放ちながら、伸ばした左腕を大きく左肩の真上まで回す。そして腕が真直ぐに天を指した瞬間、左腰のバックルへ下ろし、同時に右手で正面のバックルの左端を掴む。

「……身ッ！！」

溜めた掛け声を締めると同時に、二つのバックルを反転。右腕を腰だめに、左腕でＶ字を描き、最初の姿勢をちょうど左右反転させた姿勢をとる。

《Ｒｉｄｅ　ＯＮ》

電子音声と共に二つのバックルから光が渦を巻き、健を包み込む。やがて光の渦を赤い装甲に包まれた左腕が突き破り、自身を覆うそれを振り払う。

光の渦を振り払い現れたのは、黒いボディに赤いラインの走る濃緑の装甲。赤い装甲に覆われた四肢。風になびく、血に染まったような真紅のマフラー。そして熱気を吐き出す銀色の顎部クラッシャーに、赤く輝く複眼をもつバッタのような濃緑の仮面。それらを備えた仮面の戦士。

「仮面ライダー……リバースッ！！」

仮面ライダーリバースは名乗りを上げながら、腕を大きく回し、左肘を前、右腕を大きく引いて拳を顔の横に添えた半身の構えをとる。

「黒い怪人たち……お前たちが理由もなく人々を害するのなら、そんな理不尽な流れは俺がひっくり返すッ！！」

リバースは鋭く吠え、起き上がった蝉怪人目がけ踏み込む。

「セェイィィヤッ！」

瞬きの間にガルドとの距離を詰めた仮面ライダーリバース。すかさず気合の声と共に左、右と拳を叩き込む。

「この世界の、仮面ライダーッ！？」

驚きの声を上げ、再び目を見開く悠樹。その視線の先ではリバースが、ガルドの苦し紛れに突き出した腕を右手で取り、左の水平チョップを胸、鼻先へと立て続けに打ち込んでいる。
「仮面ライダー、リバースって言ったか？　翔炎、知ってるライダーか？」
悠樹はリバースの動きを目で追いながら、右手に乗った相棒へ尋ねる。だがその問いに、翔炎は首を左右に振る。
『いや、初めて見るライダーだ。だが、深い緑の仮面に赤い目。そして紅のマフラー……あの姿はまるで、伝説のッ！？』
翔炎が呆然と紡ぎ出した言葉が切れるや否や、リバースはガルドが開いた手で繰り出した横薙ぎの一撃を潜り抜け、地を削るようなローキックを叩き込む。さらにそこから右わき腹に左拳を打ち込み、間髪いれずバランスを崩した体を持ち上げて投げ飛ばす。
それを見て翔炎は我に返ったのか、弾かれる様に自身を手の中に収めた悠樹を振り仰ぐ。
『悠樹、行くぞ！　変身だ！』
「あ、ああ！　任せっきりにはできねえからな」
翔炎の言葉に引き戻され、慌てて頷く悠樹。それに続いて、翔炎が赤い輝きを放ち、バックルへと変わる。悠樹はそれを腰へ装着、ソウルチップを装填する。
《Ｓｙｓｔｅｍ　ｌｏａｄｉｎｇ……ｓｔａｎｄｂｙ》
「変身！」
《Ｌｏａｄ　Ｕｐ》
悠樹の眼前に投影される赤い「火」の一字。それが球状に広がって悠樹を包む。そして響く激突音。続いて赤いエネルギー球が下から燃え上がり、その中から変身を終えた烈火が姿を現す。
「おおりゃあああッ！！」
気合の声を上げ、立ち上がったガルドを目がけ駆け出す烈火。走りながら烈火は左腰のホルダーからチップを取り出す。そしてガルドの頭を見据えて踏み切り、空中で足のリーダーへチップを装填す

る。
《Ｈｅａｔ　Ｌｅｇ》
その電子音が響くと同時に、烈火の両足に炎が灯る。そして火炎を纏った右足でガルドを横合から蹴り抜く。
「ジジジッ！？」
熱と痛みに鳴き声を上げ吹き飛ぶガルド・シケーダ。煙を上げて転がるそれを見据えながら、烈火は炎の灯った脚で着地する。
「キミは……さっきのッ！？」
驚きの声を上げて隣りへ駆け寄るリバース。それに烈火は赤い仮面に輝く黄色の目を向ける。
「仮面ライダー、烈火。あいつらは元々俺達の敵だ。助けられっぱなしってわけにはいかねえからな」
「烈火……？」
変身によって体格の差が縮まり、ほぼ同じ高さで交叉する黄と赤の視線。
「ジジジジッ」
そこへ体勢をたてなおしたガルド・シケーダが正面から突っ込んでくる。
「セェア！」
「オリャ！」
ガルドの突撃を迎え撃とうと、揃って足を付き出す二人のライダー。
「ムッ！？」
「なんだッ！？」
だがガルド・シケーダは、蹴りが直撃する直前にほぼ直角に急上昇。それと同時に、小さな火炎弾をばら撒いていく。
「グゥッ！？」
思わぬ火炎弾の乱射に、歯噛みする二人のライダー。ガルドの動きを追って顔を上げていた二人は、急降下を始めるガルドにその場から飛び退く。直後、二人のいた空間を機銃の掃射の様に薙ぐ火炎

弾の雨。
「セアッ！！」
低空に降下してきたガルド目がけ、リバースが拳に溜めたエネルギーを腕を振って撃ち出す。だがそれはガルドの急旋回によってかわされ、空へ溶けるように消える。
そして、再度降下してきたガルド・シケーダから火炎弾の雨が降り注ぐ。
「クッ！」
「クッソッ！」
両腕を盾にしてそれを防ぐリバースと烈火。
『悠樹！　ここは俺達がッ！？』
翔炎の声が響く中、烈火は腕を翳したまま、降り注ぐ炎から逃れる。そして同じように炎の雨に晒されているリバースへ顔を向ける。だがその瞬間、烈火が口を開くよりも早く、リバースは足を揃えて跳躍。停車していた黒いスポーツバイクに飛び乗る。
「乗ってくれ、烈火君ッ！！」
轟くエンジンに負けぬように声を張り上げ、烈火に呼びかけるリバース。そこへ降り注ぐ火炎弾。リバースは愛車を巧みに操り、それをかわしていく。そして烈火の目の前で横滑りの形でブレーキをかける。
「早くッ！」
「あ、ああ！」
リバースの鋭い声に、烈火は言われるがままにタンデムシートに跨る。リバースはそれを確かめ、スロットルを捻る。すると甲高い駆動音と共にバイクの前輪と後輪が光を纏い、空へ踏み出す。
撃ち下ろされる火炎弾を後方に流し、空を踏んで駆け上るバイク。その後部座席に跨りながら、烈火は新しく取り出したチップを右腕に装填する。
《Ｗｅａｐｏｎ……Ｈｅａｔ　Ｓａｂｅｒ》
烈火はリバースを掴む腕を素早く入れ替え、右の握り手から炎を

伸ばし、その中から炎の剣を呼び出す。
「おぉりゃぁあああッ！！」
そしてガルドとのすれ違いざまに、烈火はガルドの片羽を切り飛ばす。
「ジジッ！？」
バランスを崩し、錐揉み回転して頭から地面へ向かうガルド。
「頼むぞ、オーバーカム！」
落下するガルドの姿を肩越しに見据え、リバースは愛車の機首を切り返す。
「しっかり掴まっていてくれよ、烈火君ッ！！」
リバースの言葉に続き、バイクが加速。ガルド・シケーダを追い抜くと地面すれすれで車体を切り返し、迎え撃つ形になる。
《Ｆｕｌｌ　Ｏｐｅｎ》
そして烈火の物とは違う電子音声が響くや否や、バイクの機首が光の渦を纏って跳ね上がり、落ちてくるガルドへ向けて真正面から突撃する。
激突、そしてバラバラに千切れるガルド。その残骸を後ろへ流して、リバースと烈火を乗せたバイクは、放物線を描いてタイヤから地面へ落下する。だが、着地の直前に車輪が輝いて勢いを殺し、柔らかに土を踏む。
「ライダー……ブレイクッ！」
そしてリバースがそう告げた瞬間、後方でガルドの残骸の物らしき爆発が起こる。
後方から来る風を受けながら、烈火は前のめりに愛車に跨る、仮面ライダーリバースの背中を見据える。
「こいつが、この世界の仮面ライダー……」

Ｃｈａｐｔｅｒ２（前書き）

読んでくださっている皆様、ありがとうございます！

ジャードさん公認の弄られキャラである小野川海斗君を描写していると、どうも「キン肉マン　Ｇｏ　Ｆｉｇｈｔ」の一節が浮かんでしまいます。

それでは、本編へどうぞ。今回も楽しんでいただけましたら嬉しく思います。

Chapter2

「無数の並行世界、次元移動、四種族の精霊。そしてその精霊の力を借りた仮面ライダーか……」

呟き、赤いラベルを貼った褐色の瓶に口をつける健。その隣には、同じく茶褐色の瓶を持った悠樹がマシン・オーバーカムに寄りかかっている。

蝉の怪人と戦った場所から少し離れた場所にある、寂れた木造の駅、永江駅。戦いの後、この人気のない駅前に移動した二人はお互いに名乗り合って簡単な自己紹介を済ませた。その中で悠樹とその肩にとまった翔炎から、彼らが異世界からの来訪者であることが語られた。

「次元移動ならディケイドってライダーも出来るけど……そうだ、あいつらこの世界には来てねえのか？」

ビタミン色の炭酸飲料の入った瓶から口を放して尋ねる悠樹。聞き覚えのない名前に、健も瓶から口を放して首を左右に振る。

「いや、ゴメン。俺は会ってないな」

その答えに悠樹は軽く肩を落とす。

「そっか、士たちも回ってない世界なのか」

そう言って悠樹は手に持った瓶の残りを一息に煽る。そしてオーバーカムのシートに止まっていた翔炎と眉尻を下げて顔を見合わせる。

そんな二人の様子を見て、健は手に持った炭酸飲料を飲み干し、悠樹たちへ笑みを向ける。

「まあ、寝泊まりは家（ウチ）でしてもらえばいいし、まずは悠樹君の仲間を探そう。この近くにはいるのかな？」

すると悠樹と翔炎は、目を剥き、弾かれたように健を見る。

「し、信じて、くれるのか？」

そんな二人の反応に、今度は健が口を半ば開けた形で顔を固める。

そして空いた手の指で額を掻きながら、口を動かす。
「信じて……って、あれ？　そっち？　こっちでの寝床とかの心配じゃなくて？」
「いや、確かにそっちも心配だったけどよ……」
『説得する手間も省けて助かったが、おおらかにも程があるだろ』
そう言われて健は、苦笑交じりに額を掻き続ける。
「そうかな？」
健がそう言うや否や、緑色のジャケットから呼び出し音が鳴る。
「……っと、ゴメン」
悠樹たちに一言断り、ポケットから黒地に緑のラインが入った折り畳み式の携帯電話を取り出す。スイッチを押して展開すると、通話ボタンを押して頬に添える。
「もしもし、薫？」
《助けて！　お兄ちゃんッ！》
電話越しに叫ぶ従妹。そのただならぬ様子に、健は眉根を寄せ、目元を引き締める。
「落ち着いて！　今どこに居るッ！？」
《本の文車の前ッ！　蟻怪人の集団が出てきてッ！》
薫の居る方角を睨む健。
「分かったッ！　すぐに行くッ！」
そう言って健は通話を切り、畳んだ携帯を上着のポケットにしまう。そして愛車に跨ろうとすると、シートに止まっていた翔炎が羽ばたく。
『健ッ！　今お前の見ていた方角からガルドの気配が！』
「マジかよッ！？」
相棒の言葉に目を剥く悠樹。健はそんな二人のやり取りを聞きながら、オーバーカムのエンジンをかけてヘルメットを被る。そして予備のハーフヘルメットを悠樹に差し出す。
「急いで行く、乗ってくれッ！！」
「ああ！」

悠樹は健からヘルメットを受け取って頷き、それを被ってオーバーカムのタンデムシートへ跨る。そしてその肩に翔炎が止まる。
「行くぞ！　悠樹君、翔炎君ッ！」
健は自分の腰に腕が回ったのを確かめると、体を前に倒してハンドルを握り、スロットルを捻る。瞬間、二人と一羽を乗せた黒いマシンは唸りを上げて走り出した。

時間は少しさかのぼる。
見知らぬ街の一角で目覚めた舞は、翠の龍、風牙を連れて街を歩いていた。
「うぅん。どこか目印になる様な場所は無いものかな？」
呟きながら合流地点になりそうな場所を探す舞。その右隣では風牙も同じように周囲に視線を巡らせている。
『舞。あの少女に訊いてみてはどうだ？』
「ん？　どれどれ？」
風牙がそう言って示す方向を見る舞。その方向には、「本の文車」と書かれた看板を掲げる書店から出てくる、セーラー服姿の少女の姿があった。
ボブカットの黒髪に、丸い黒縁の眼鏡。小柄な体を包む、きちんとしたセーラー服からは真面目でしっかりものといった雰囲気が醸し出されている。
「うん。しっかりしてそうだし、あの子に訊いてみよっか」
そう言うが早いか、舞は目当ての少女の許へ駆け寄る。
「ねえねえ、そこの眼鏡の子。ちょっといいかな？」
呼びとめる舞の声に、眼鏡の少女は足を止めて振り返る。
「私ですか？　何でしょう？」
舞を軽く見上げる形で応える少女。舞はそんな少女へにこやかな笑顔を向ける。
「ゴメンね、呼びとめたりして。私この街初めてで、道を訊きたい

のだよ」
　すると少女も舞へ微笑みを返し、頷く。
「はい、いいですよ。何処へ行きたいんですか？」
　快く了承してくれた少女に、舞は笑みを深めて本題に入る。
「ありがと。実は一緒にいた皆とはぐれちゃってね。合流するのにいい場所を知りたいんだけど、この近くで分かりやすい場所ってないかな？」
「集合場所に出来そうな場所ですか？　そうですね……」
　そう言って少女は口元に指を添え、軽く首を傾げて考え込むような仕草を見せる。そして少女が何か思いついたように眉を動かす。
『舞！　ガルドだッ！？』
　その刹那、少女の口が動くよりも早く、風牙の警告が舞の耳を叩く。それに従い、少女の肩を抱えて同時に身をかがめる舞。
「え！？」
　少女の口から驚きの声が漏れる。直後、頭上を風切り音が通り過ぎる。
「嘘……ッ！　五体も！？」
　不意打ちをやり過ごして顔を上げた舞は、周囲を取り囲む五体の黒い異形に息を呑む。
　じりじりと包囲を狭めるアリを模した五体のガルド。それと腕の中の少女の姿を見比べて、舞は唇を引き締めて頷く。
『私の方に引きつけて……この子だけでも逃がさないと』
　そう心中で呟き、少女の肩から手を放す舞。だがその瞬間、手を握られて意識していない方向へ引っ張られる。
「逃げてッ！」
　身を翻した少女に手を引かれく形で、舞はその方向へ一緒に走りだす。
「ちょ、ちょっとッ！？」
『舞ッ！？』
　戸惑う舞と風牙をよそに、少女は携帯電話を取り出し、番号を呼

び出してそこに掛ける。
行く手を塞ごうとするガルド・アントに方向を切り返し、近くに止めてある車の陰に滑り込む。その瞬間、焦燥感に包まれていた少女の顔に希望の光が差す。
「助けて！　お兄ちゃんッ！」
「え、この子って、まさかッ！？」
『仮面ライダーの身内なのかッ！？』
背後から伸びる手を、舞は少女の背を押しながら身を捩ってかわす。
「本の文車の前ッ！　蟻怪人の集団が出てきてッ！」
車の陰を抜け少女が電話越しに叫ぶ。その次の瞬間、ガルド・アントが舞と少女の前方へ舞い降りる。
「危ないッ！」
とっさに少女の体を抱えて横へ飛ぶ舞。二人は抱き合う形でアスファルトの上を転がる。二転、三転し止まると、舞は素早く身を起こし、少女を背後に隠す形でガルド達と向かい合う。袖を掴む震える手。それに気づき、舞が振り返る。すると、間合いを狭めてくるガルドの姿に体を震わせる少女の姿が目に入る。
『怖いよね……それなのに私を逃がそうとして……』
そんな少女へ微笑み、舞は再びガルド達を見据える。
「ねえ、電話で呼んでたお兄さんって、仮面ライダーではないかな？」
「え？」
舞の問いに呆然と声を漏らす少女。そんな少女へ笑みを深めて頷く。
「私のことなら大丈夫。私も、ライダーだから……風牙ッ！」
『ああッ！』
舞の呼びかけに、風牙が翠のバックルへ変化しながら相棒へ向かって飛びこむ。舞はそれを受け取り、腰へ装着。左腰のホルダーから取り出したソウルチップをセットする。

《Ｓｙｓｔｅｍ　ｌｏａｄｉｎｇ……ｓｔａｎｄｂｙ》
「変身！」
《Ｌｏａｄ　Ｕｐ》
ベルトから現れた翠色の風の文字。それは融け広がり、エネルギーの球となって舞を包む。続いて巻き起こった風がエネルギーの幕を吹き飛ばし、青龍のライダー烈風が現れる。
そこへガルド・アントの一匹が左側から拳を振りかぶり躍りかかる。
「ハァッ！」
対する烈風は二枚のチップを左手に、カウンターの左蹴りを突き出す。腹を抑えたたらを踏むガルド。そこへすかさず右回し蹴りを叩き込みながら、烈風は右腕のリーダーへチップの一枚を装填する。
《Ｗｅａｐｏｎ……Ｃｙｃｌｏｎｅ　Ｄａｇｇｅｒ》
「ハ！」
右の握り手から巻き起こる旋風。それが固まって出来た刃を、身を翻し、逆側から迫る二匹目へ突き刺す。
「ギギッ！？」
悲鳴と火花を上げて下がるガルド。それを見据えながら、烈風は右手の短剣を素早く逆手に持ち替えて構え直す。
「この世界のライダーが到着する前に、蹴散らしてしまおうではないか」
『複数の敵を相手にするのは苦手なんだけど、ね』
強気の発言とは裏腹に、ダガーを握る右手が震える。それを握り殺し、烈風はベルトの上部へもう一枚のチップを差し込む。
《Ｉｌｌｕｓｉｏｎ》
電子音と共に、烈風の両脇で翠色のつむじ風が立ち上る。それは人の形を成し、右手にダガーを持った烈風へと変わる。
風から生まれた二体の分身は、一歩前に出て手近なガルド・アントを斬りつける。
「ギ！」

「ギギ！？」
顎を鳴らして仰け反るガルド。その腹へ二体の分身体は揃って蹴りを叩きこむ。
そこへ、入れ替わる様に別のガルド・アントが躍りかかる。分身体は辛うじてそれをダガーで受け止めるものの、自由な手による拳の連撃が襲いかかる。それをブロックする為に組み合う形となり、分身体は動きを止められてしまう。
そしてその隙に、残り一体のガルド・アントが少女を背に立つ本体へと迫る。
喉を掴もうと伸びる右手。烈風はそれを短剣の腹で受け流す。直後、ギチギチと鳴る顎が、喰らいつこうと眼前へ迫る。
「ちょっ！？」
鋭い顎と自身の間に短剣を差し込み防ぐ烈風。だが安堵の息をつく間もなく、両脇から抱きしめようとするかのように黒い腕が挟み込んでくる。
烈風はとっさに握っていたダガーを放し、身を屈めてガルド・アントの腕を潜る。空ぶり、前のめりになった黒い体。
『舞！　足を取れッ！！』
風牙の声に押される様に、烈風はつんのめった黒い両足を抱えて踏み込む。
「ええいッ！！」
烈風のタックルを受け、背中、頭とアスファルトにぶつけて倒れるガルド。烈風はすぐさまガルドから身を放すと、分身体の一体がガルドの攻撃を受けつつも投げてよこしたサイクロンダガーを受け取る。そしてその柄へすかさず翠の龍が刻まれたチップを装填する。
《Ｆｉｎａｌ　ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｐｐｕ》
その電子音が響くと同時に、分身体がつむじ風に戻る。直後、烈風は仰向けになったガルド・アントへ、手に持った短剣を投げつける。すると風切り音を上げて飛ぶダガーがいくつにも分かれ、同時に分身体を作っていた風もサイクロンダガーへ変わる。三か所で現

れた無数の刃は、それぞれに標的の黒い表皮を貫いて突き刺さって行く。
「ギ、ギギッ！？　ギィッ！」
無数の短剣を突き刺す技、風破・連刺撃を受けた三体のガルド・アントは、手足をばたつかせ、顎を激しく動かして爆散する。
「きゃあッ！？」
その爆発に、背後から少女の悲鳴が上がる。周囲を見回せば、残る二体のガルドは仲間の爆発に巻き込まれたのか、大きく距離を開けて仰向けに倒れていた。
「ここからなら！」
このチャンスを逃すまいと、烈風は左腰のホルダーから一枚のチップを取り出す。
だがその瞬間、炎を纏った何かが烈風を横合から殴りつける。
「アウッ！？」
弱点である炎を纏った一撃を受けて、横倒しに倒れる烈風。その左手からチップが離れ、地面を跳ねて風となって消える。
「しまった……！」
それを目で追って、烈風は微かに呻く。
「いやあああッ！？」
刹那、不意に響いた悲鳴に振り返れば、一回り大きなガルド・アントが炎の灯った腕を眼鏡の少女へ振り上げていた。
「ッ！　させない！！」
燃え盛る拳が振り下ろされるよりも早く、烈風は両手足で地面を叩いて飛びこみ、ガルドの目の前から少女を攫う。
「アァッ！？」
「お姉さん！？」
しかし避けきれなかった炎が烈風の左足を焼き、熱と痛みが弾ける。そんな痛みに苛まれながらも、烈風は少女を抱きしめて身を捩り、地面との激突から庇う。
「ウ……ッ！？」

背を撃つ衝撃にうめき声を漏らす烈風。そこから少女を自身の陰に送り、腕をついて立ち上がろうとする。だが、足を襲う火傷の痛みに踏ん張りが利かず、その場に膝をつく。
『立つんだ舞ッ！　このままだと、この少女もろともなぶり殺しになるッ！』
「フ……ウウッ！」
内に響く風牙の声に己を奮い立たせ、立ち上がる烈風。そして二体の部下を伴って悠然と歩み寄るガルド・アントを睨み、少女を庇うようにして拳を構える。
烈風は肩で息をしながら、しかし少女の前から決して動こうとはしない。そこへじりじりと迫るガルド。やがて先頭に立つ大柄なガルド・アントが拳に炎を灯して振りかぶる。
「ク……ッ！」
息を呑む烈風。だがその瞬間、猛然と近づく唸り声にも似たエンジン音が響き渡る。
「お兄ちゃんッ！？」
「え！？」
少女の叫びに吊られる様に烈風が顔を上げる。
《Ｒｉｄｅ　ＯＮ》
《Ｌｏａｄ　Ｕｐ》
直後、電子音声と共に、渦を巻く光の塊と炎の塊が上空から急降下する。その光と炎の塊はガルドへぶつかる前に爆ぜ、中から蹴り足を突き出した赤い目のバッタのライダーと黄色い目の朱雀のライダーが姿を現す。
「悠樹君ッ！」
『翔炎ッ！』
「セェエアアアアアアッ！？！」
烈火ともう一人のライダーはその勢いのまま、裂帛の気合と共に先頭のガルド・アントの胸に突き刺さる。

「ギギギッ！？」
顎を鳴らして吹き飛ぶガルド。一方で蹴りの反動に乗って身を翻すリバースと烈火。二人はその勢いのまま、龍の顔を模した仮面を持つ、烈火によく似た細身のライダーの斜め前に降り立つ。
「大丈夫か！　霞河！？」
右拳を前に、左手を腰のホルダーへ伸ばした状態で、右肩越しに仲間の様子を窺う烈火。するとその仲間のライダー、烈風は戸惑い交じりに首を縦に振る。
「う、うん、どうにか……」
烈火に答えながら、烈風は恐る恐るといった様子でリバースへ視線を移す。
「悠樹君、もしかして、この人が……」
「お兄ちゃんッ！！」
烈風の言葉を遮って、薫がその陰から顔を出す。リバースは左肩越しに振り返り、安堵に顔をほころばせる従妹へ頷く。そして不意に声を上げた薫へ視線を向ける烈風へ視線を移す。
「ありがとう。薫を守ってくれて」
「あ、いえ……あの、あなたが？」
慌てて頭を振る烈風。そんな烈風へリバースは再び頷いて、体勢を立て直しつつあるガルドを見据える。
「ああ、仮面ライダーリバース。もう少し薫のことを頼む。ここからは、俺達も戦う！」
背後の烈風へ告げ、赤い両拳を握り固めるリバース。その隣では、烈火が右腕にチップをセットする。
《Ｂｌａｚｅ　Ａｒｍ》
「だから無理すんな。ちょっと休んでろよ」
そして烈火は発声音と共に燃え上がった右腕を振り、ソフトボール大の火球を造り出して握りしめる。
「さあ……第二ラウンド、開戦だッ！！」

その宣言に続けて、烈火は火球を握りしめた右手を振りかぶり、開戦を告げる一撃を投げ放つ。
ガルド達の目の前で爆ぜる火球。凝縮された火炎が視界を遮る中、リバースと烈火は同時に踏み込む。
「おぉりゃあああッ！！」
走りながら二発、三発と次々に火球を生み出し、投げつける烈火。次々と爆炎が広がる中、炎の壁をこじ開けてリーダー格のガルド・アントが姿を現す。そのガルドへリバースは一息に踏み込み、両肩を掴んで組み合う。
「悠樹君ッ！」
「おおッ！」
鋭い気声を上げ、烈火はリバースの肩に乗って跳躍。そして空中でホルダーから二枚取り出し、燃え盛る右腕に装填する。
《Ｗｅａｐｏｎ……Ｔｗｉｎ　Ｂｌａｄｅｓ》
両の握り手から炎が噴き出し、一対の火炎剣が烈火の両手に現れる。そしてすかさず、摘んでいた二枚目のチップを右の剣の柄にセット。
《Ｆｉｎａｌ　ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｃｃａ》
轟と音を立て、翼にも似た炎を噴き出すツインブレイズ。剣から伸びる炎の翼を広げ、二体のガルドの間へ舞い降りる烈火。
「おぉぉりゃあああああッ！！」
直後、身を捻り、回転しながら炎の竜巻となって再び舞い上がる。渦巻く炎と刃に飲み込まれた二体のガルド・アントは瞬時に消し炭となって風に散る。
烈火の巻き起こした熱風に焙られながら、ガルド・アントはリバースと組み合った腕を轟言いに振り払う。そしてすかさず突き出される炎の拳をリバースは首を逸らして紙一重でかわす。
「セェアッ！」
頬を焼く熱を感じながら、右拳をガルドの脇腹へ叩きこむ。続き、苦し紛れに突き出される黒い拳。リバースはそれを掴み、攻撃の勢

いの乗せて背負い投げる。
「イヤアッ！！」
そしてリバースはすかさず足を揃えて跳躍。地に転がったリーダーアントへ足から飛び込む。だがその追撃は横転したガルドによってかわされる。
「クッ」
そして起き上がりざまに振るわれた回し蹴りを、リバースは身を逸らしてかわす。蹴爪が掠った顎先から火花が散る。そこへすかさず迫る炎を纏った左腕。リバースはそれを右腕の装甲で受け流し、続く右拳を左裏拳で叩き落とす。だがリーダーアントは弾かれた勢いに乗って腕を回し、両腕を揃えて振り下ろす。
「グッ！」
それを両肩で受けながらも、リバースは己を撃つ両手を握りしめる。
「ギギィッ！？」
それを振り払おうと、腕から炎を吹きだすガルド。
「グゥ！　オオッ！！」
腕を焼く熱に呻きながらも、リバースはガルドの顔面へ額を叩き付ける。
「ギギッ！？」
不意の頭突きに顎を鳴らして怯むガルド。その隙を逃さず、リバースは右手で腰のバックルを展開させる。
《Ｆｕｌｌ　Ｏｐｅｎ》
腰から鳴り響く電子音声と渦を巻く光。光に包まれたリバースは、露わになったガルドの喉を右手で握りしめる。そして左手で腰を掴み、足を払ってガルドの黒い体を持ち上げると、そのまま頭上で激しく回転させる。
「セェエアァァアアアアアアッ！！」
気合の声と共に回転の勢いを上げていくリバース。やがて回転する怪人の生み出す気流は竜巻となり、リバースを包む。そして竜巻

の中でリバースはガルドから手を放す。
「セイヤアアアアアアッ！！」
そしてリバースは雄叫びと共に、回転の軸となっている臍に当る部位へ、全力の双掌打を叩きこむ。その一撃に猛然と回転しながら天へ昇るガルド。
「今だッ！」
宙を舞うガルドから視線を外し、烈風を見るリバース。そのクラッシャーから熱気と共に放った言葉に従い、烈風はホルダーから二枚のチップを取り出す。
「は、はい！」
《Ｗｅａｐｏｎ……Ｃｙｃｌｏｎｅ　Ｓｈｏｔ》
《Ｆｉｎａｌ　ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｐｐｕ》
電子音と共に現れた銃、サイクロンショットへ、ファイナルアタックチップをセットする烈風。直後、ガルドを包む竜巻が伸び、サイクロンショットの銃口と繋がる。
「はあああああああッ！！」
トリガーによって解放されたエネルギーは、天を目指す龍の如くうねり、空へ昇って行く。それが通り過ぎた後、宙を舞っていたガルドは塵も残さず消え失せていた。
「や、やったぁ……！」
それを見届けて安心したのか、その場にへたり込む烈風。同時に、その体を覆う装甲が淡く輝き、翠色の風となって散る。その中から翠色の龍を伴った、青みがかったセミロングの髪を持つ、セーラー服姿の少女が姿を現す。
リバースは自身もバックルの向きを戻して、健の姿に戻る。そして健はへたり込んだ少女の許へ歩み寄って右手を差し出す。
「足は大丈夫？　立てる？」
健が頬笑みを浮かべてそう尋ねる。すると烈風だった少女、霞川舞は目の前に差し出されて手に自分の手を重ねる。
「あ、ありがとうございます」

素直に礼を言う舞を助け起こす健。
「霞河！」
「お兄ちゃん！」
そこへ、変身を解除した悠樹と、薫が駆け寄ってくる。

精肉店や八百屋、和菓子屋など様々な店の並ぶ永江商店街。健は家路へ続く道を、薫、悠樹を連れ、舞の腰掛けたオーバーカムを押し歩いていた。
「何か、すみません、健さん」
時折周囲から向けられる視線に身を縮ませながら、車上の舞が礼を言う。
「気にしないで。じきにウチにつくから、もう少しだけ我慢して」
振りかえり、笑顔で言う健。そして前を向き、近づく赤い道化の踊る看板を正面に再び口を開く。
「悠樹君の話だと、後二人だったよね？　家で舞ちゃんの手当てをして、一休みしたら探しに行こう」
「ああ、頼む」
そんな悠樹へ振りむき、頷く健。すると、薫が何かに気が付いたかのように、身を傾けて健の陰から身を乗り出す。
「あれ？　家の前に居るのって……」
その薫の言葉に気づいて前を向くと、ベレー帽を被り、首から本格的なカメラを提げた薫の友達、新田文香の姿があった。文香は、健たちの家、喫茶店スカーレットジョーカーの前で暗褐色の髪を持つ見知らぬ学ランの少年と向き合っていた。
「あ！」
「もしかして……」
その少年の姿を見て、悠樹、舞も僅かに驚きを含んだ声を漏らす。すると、文香と優しげな顔立ちの少年もこちらの気配を察してかこちらに顔を向ける。その瞬間、少年の顔の横に現れた水色の亀の姿

を見て、健も事情を察した。
「ああ、彼が……」
足を止めて呟く健。そこへ呆然とこちらを見る少年を置いて、文香が駆け寄ってくる。
「お兄さん、仮面ライダーですよ！　お兄さん以外の仮面ライダーを見つけましたよ！」
目を輝かせて、興奮気味に捲し立てる文香。そして文香が言葉を切るや否や、悠樹と舞が声を上げる。
「渉！」
「秋元君！？」
文香は自分の連れてきた少年の名を呼ぶ二人へ視線を移し、再び口を開く。
「あの、もしかしてこのお二人も……？」
「仮面ライダーなの」
頷きながら友人へ告げる薫。その内容に、文香の眼が再び輝きだす。
「おおうッ！　この場に仮面ライダーが四人もッ！？」
終結する仮面ライダーに、カメラを握った文香が歓声を上げる。

一方その頃。潮を含んだ風の吹く浜永湖。その湖面から突き出たテトラポッドの先端の一つで、ツンツン頭の少年、小野川海斗が波立つ湖面を眺めていた。
海斗はおもむろに両手を口に添えてメガホンを作ると、息を大きく吸い込む。そして一拍の間を置いて、肺に溜めこんだ潮臭い空気を、声に変えて叫ぶ。
「いったい、ここは、どぉこなんだあぁぁぁぁぁぁッ！？！」
湖と空に吸い込まれる迷子の叫び。その横では小さな黄色い虎、爪雷が溜息を漏らす。
『完っ璧に迷いやがったな……当てもなく突っ走りやがるからだ』

その呆れ混じりの呟きに、海斗は弾かれたように相棒へ振りかえる。
「何だよ爪雷ッ！　俺だってなぁぁぁッ！！」
その瞬間一際強い風が吹き、海斗の体をあおる。
「ウェッ！？　うおッ！？」
狭い足場で、急に向きを変えた所を襲った強風に、海斗は腕をバタつかせながら、身を前後左右へ仰け反らせてバランスを取ろうとする。だがコンクリートを踏む足がずるりと滑り、その身は湖面へと投げ出される。
「うえええええええいッ！？！」
叫びに続き、派手な水音と飛沫があがる。
「あば、あば！　あばばばばばば！」
深くはないであろう場所で飛沫を上げてもがく海斗。爪雷はそんな相棒の姿を見下ろして、深々と、深々と、ため息を吐き出した。

Ｃｈａｐｔｅｒ３（前書き）

読んでくださっている皆様、ありがとうございます！

当初の予定から大分エピソードの配分が変わっています。５話か下手をすれば６話までいくかもしれません。

今回もフリーダムです。すみません、ジャードさん。

Chapter3

《Ｌｏａｄ　Ｕｐ》

凍てつく大気を砕いて現れる、玄武の戦士烈氷。そこへ、猫科肉食獣の顔をした黒い怪人が右の拳を振り下ろす。だが烈氷はその拳を、腰を落とし分厚い左肩の装甲で受け止める。

「どんな世界なのか昔の新聞を当ろうと思ったらこれか……」

素早く後方へ飛び退くガルドを見送って烈氷は呟く。後ろを見やれば、そこにはカメラを構えた姿勢で立ちつくす、ベレー帽にセーラー服と言った姿の少女がいた。

烈氷は首を左右に振ると、視線を少女からガルドへ戻す。

「あのガルド、何か見覚えがあると思ったら、前に学校に襲ってきた奴と同じ奴か」

烈氷が懐かしさを込めた言葉を漏らす。そして終えるや否や、ガルド・パンサーは右手にレイピアを出現させ、素早い踏み込みと共に雷光のような突きを繰り出す。

《Ｗｅａｐｏｎ……Ｉｃｅ　Ｈａｌｂｅｒｄ》

だがそれと同時に烈氷は持っていたチップを右腕に装填。右の握り手から伸びた氷の棒に左手を添え、真直ぐに迫る針のような切っ先をその半ばで逸らす。そして鍔と氷柱がぶつかると同時に氷が弾け、水色の鉾槍が姿を現す。

「それ」

烈氷は軽い声と共に、手に持ったアイスハルバードを回し、ガルドのレイピアを根元から圧し折る。続けて得物を失ったガルド・パンサーを柄の部分で押し退け、すかさず周りの空気を凍りつかせている穂先を、がら空きの脇腹へ叩き込む。

「グガアァァッ！？」

凍気を帯びた一撃を受け、たたらを踏むガルド。その姿を烈氷は右手のハルバードを肩に担ぎながら眺める。

「ふぅん……雷属性か。波賀君が前倒したのと同じタイプみたいだね」
烈氷が呟く間に、体勢を整えるガルド・パンサー。
「グアオッ！！」
そしてガルドは手に持ったレイピアの柄を投げ捨てると、握った右拳に電撃を漲らせて踏み込んでくる。
「おっと」
その踏み込みに穂先を突き出す烈氷。冷気を帯びたそれはカウンターの形でガルドの肩を突く。
「ギャンッ！？」
苦悶の声を上げて怯むガルド。そこへ追撃の突きを繰り出す烈氷。だがその追撃は身を捻ったガルドの脇を掠めるに終わる。そこから回転の勢いに乗った横薙ぎの爪が振るわれる。
「お、わ！？」
横合からの一撃を烈氷は踏みとどまって避ける。だが反撃を繰り出す間もなく電撃を纏った爪が続く。それをとっさにハルバードの柄を盾に受け止める烈氷。さらに続く左右の連撃も、同じくハルバードの柄で受け止めていく。
「ガアアッ！！」
攻撃をことごとく捌かれて痺れを切らしたのか、ガルドが咆哮と共に、大振りの右拳を突き出してくる。
「それッ！」
烈氷は雷光を纏ったそれを得物で受け流し、ガルドの腹に膝蹴りを叩きこむ。
「ガグ！？　ガアッ！！」
腹を突き刺す一撃に呻きながらも、再度短い咆哮を上げて蹴りを突き出すガルド・パンサー。
「甘いよ？」
それを片足を引いてかわし、同時にガルドの体を支える軸足を鉾槍の柄で叩き払う。

「ギャッ！」
鼻からアスファルトの地面へ倒れ込み、くぐもった声を上げるガルド。その背中へ凍気を纏った穂先を突きつけて、烈氷は呟く。
「猫科で雷属性、まるで小野川君の烈雷だね。でも……」
言いながら烈氷は左手でチップを取り出し、ハルバードの柄に付いたリーダーへセットする。
《Ｆｉｎａｌ　Ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｈｈｙｏ》
背中に浴びせられる冷気と電子音声に、ガルド・パンサーは身を震わせる。そうするや否や、弱点属性を帯びた武器が身を切るのも構わずに走りだす。
「ヒッ！？」
そのガルドの視線の先には、目元と頬を引きつらせ、身を強張らせる少女の姿があった。だがガルド・パンサーがその手を少女へ伸ばした瞬間、その体は氷の中に封じ込まれる。
「……小野川君は底抜けのバカだけど、キミみたいな救いようのない屑じゃないね」
烈氷は凍りついたガルドへ冷たく吐き捨て、アイスハルバードの斧の部分を氷漬けのガルドの脳天へ振り下ろす。
ハルバードは氷もろともガルドを粉々に叩き割る。砕けたガルドはその直後に爆散。氷の粒を撒き散らして跡形もなく消え失せる。
すると、ガルドの向こう側で立ちつくしていた少女が、体を支える芯を失ったかのように、その場へへたり込む。
「お、お兄さん以外の、仮面ライダー……？」
へたり込んだまま呟く少女。その言葉を聞いて烈氷は、その身を渉のそれへ戻しながら声をかける。
「ねえ君。もしよかったら、その仮面ライダーのお兄さんって人の所へ連れて行ってくれないかな？」
「……というわけで、僕は新田さんに案内してもらってここに来た

んだ」
　カウンター席に座った渉はそう言って締めくくると、氷の浮かぶお冷に口をつける。
　赤い色の装飾の目立つ喫茶店、スカーレットジョーカーの店内。そのカウンター席の一角に舞、悠樹、渉、そして渉を案内してきた文香の順で座っている。
「ちょうど案内してきた所にお兄さんもお仲間さんも到着して、まさにグッドタイミングでしたな」
　言いながらあまり厚みの無い胸を張る文香。そんな文香に三人が揃って苦笑を浮かべる。そこで苦笑を浮かべたまま舞が口を開く。
「それにしても、こんなに早く三人合流できて良かったよ。悠樹君は健さん、私は薫ちゃん、秋元君は文香ちゃんって、まるで狙ったみたいに関係者に会えて」
　舞の言葉に続いて、その傍らに浮かぶ風牙が首を縦に振る。
『仮面ライダーは惹かれあう。これも世界の望みなのだろう。なあ、翔炎？』
　風牙から話を振られて、テーブルの上で羽根を繕っていた翔炎は、翼を啄ばむ嘴を止めて顔を上げる。
『ああ。多分爪雷と小野川も、俺達みたいに健の知り合いに案内してもらってるだろうな。この分ならすぐに全員……』
「いや、あのバカのことだから、道も聞かずに適当に走って迷ってるだろ」
　翔炎の言葉を遮って、悠樹が最後の仲間の陥っているであろう状況を口にする。すると海斗を知る者全員が、その様を思い浮かべて噛み締めるように頷く。
「小野川君なら、ありえるねぇ～……」
「いやいや、小野川君だったらきっと、迷った上に川に落ちてるよ」
　舞に続いた渉の言葉に、氷甲までもが大きく頷く。
　そんな悠樹たちの様子に、文香が軽く首を傾げる。
「おや？　お仲間はもう一人いらっしゃるので？」

「ああ、まあ……」
文香の問いに曖昧な笑みを浮かべる悠樹たち。
「ほい、お待ちどうさん」
そこへカウンター越しに低めの女性の声が投げかけられ、悠樹たちの座るカウンター席に、湯気の立つカップが並べられる。悠樹がカップを並べるその手を辿って目線を上げる。するとそこには赤いエプロンを身に付け、火のついていないタバコを口に咥えた長身の美女が、肩にかかった黒髪のポニーテールを左手で払っていた。
「ども……」
自分たちを見下ろすこの店の店主、浅井亮子に軽く頭を下げて、悠樹は目の前で湯気を立てているコーヒーのカップを手に取り、口をつける。瞬間、鼻を通り抜けた香りと、苦味の中にある深い旨みが口の中に広がる。
「美味い」
そのコーヒーの味に思わずつぶやく悠樹。左、右と仲間たちの様子を覗けば、香りを楽しんでから再度口をつける舞と、柔らかく目を細めて香りを楽しんでいるらしい渉の姿が目に入る。そして悠樹が再び顔を上げる。すると、口元を得意げな笑みで緩めた亮子の姿があった。
「事情は健から聞いたよ。まあ正直、アタシにゃあついてけない部分もあったけど、薫を助けてくれたことと、頼れる人間がこっちに居ないってことは確かみたいだね」
エプロンを押し上げる、豊かな双丘の下に通す形で腕を組み、悠樹たちを一通り眺める亮子。その様子に、悠樹のみならず、舞、渉、文香までもが頬を強張らせて亮子を見上げる。
一同の注目が集まる中、亮子は一度くわえた煙草を上下に揺らすと、唇に浮かんだ笑みを深めて頷く。
「この街に居る間は家(ウチ)に泊まりな。ただし、店の手伝いはしてもらうがね」
その亮子の言葉に、悠樹、舞、渉の三人は顔を見合わせ、揃って

安堵の息を漏らす。そこへカウンターの奥の調理場から、緑色のエプロンをつけて銀のトレイを片手に乗せた健が姿を現す。
「中途半端な時間だから軽い物だけど。さ、食べて食べて」
言いながら健は、焼き目をつけたパンで具材を挟んだサンドイッチをトレイの上から取って悠樹たちの前に並べていく。
「お、サンキュー健」
「戦い通しだったからお腹空いてたんですよ」
「いただきます」
健の用意したサンドイッチ、パニーニを手に取り齧りつく悠樹たち。焼き目がついたことで香ばしくなったパンと、ハムにチーズ、レタスと言った具が口の中で調和する。悠樹はそれらを噛み締めてのみこむ。そして温かなコーヒーに、香りを楽しみながら口をつける。
「ああ、うめぇ……」
呟き満足げに息をつく悠樹。
『それはモノを食えない俺達への当てつけかコノヤロー』
そこへ、テーブルの上から恨めしげな声と視線をぶつけてくる翔炎。
「キミらは食べられなかったのか」
カウンターへ右手をつき、翔炎を見下ろしながら健が声を掛ける。
『ああ、俺達精霊は食事を必要としない……しないが、目の前でこうも美味そうに飲み食いされるとさすがにムカつくな』
頷く翔炎に、健は左手を口元に添えて、考える様な仕草を見せる。そうして調理場側に左手を伸ばすと、一杯のカップを翔炎の前に出す。
「だったら、香りだけでも楽しんでみないか？　匂いは分かるんだろ？」
健の出したコーヒーに、翔炎のみならず、風牙、氷甲までもが集まり、鼻をひくつかせる。
『おお、これは確かに……』

『うむ、良い香りだ』
無言でうなずく氷甲も含め、香りを楽しむ精霊たち。その姿に健は口元に柔らかな笑みを浮かべる。
「健、何と話してんだい？」
「そこに何かが居るので？」
そんな健へ訝しげな視線を投げかける亮子と文香。その二人の視線に、健は苦笑を浮かべて左手の指で額を掻く。
「ええ……っと、簡単にいえば、悠樹君たちに協力してる相棒たちが居るんだ」
「私達みたいな、相性のいい人間にしか見えないんですよ」
健の説明を継いで、補足する舞。そこへオレンジ色のエプロンをつけ、急須と小振りの茶碗の乗ったトレイを持った薫が奥から出てくる。
「舞さんが呼びかけてたのって、その名前だったんですね」
「俺にははっきり見えてるんだけどね」
薫に顔を向けながら、健は翔炎の背中を左手の人差し指で撫でる。
『お、おい、健。止めてくれ！　くすぐったい！』
「ああ、ゴメンゴメン」
身を震わせる翔炎に謝りながら、指を離す健。そんな様子を見ながら、文香がカメラに手を伸ばす。
「ふむん……心霊写真の要領で撮れませんかね……？」
『俺達を幽霊亡霊と一緒にするな！』
『翔炎。気持ちは分かるが、この子には私達の言うことは聞こえんぞ』
カメラを構えて呟く文香。それにツッコミを入れる翔炎と、そんな翔炎を宥める風牙。その一方で氷甲は、自身の冷気で冷めてしまったカップの中身を名残惜しげに見つめている。
そんな相棒たちの様子に、口の端を緩めてパニーニを頬張る悠樹。そしてカップに残ったコーヒーへ口をつけようと持ち上げる。すると不意に翔炎を始めとした精霊たちが弾かれたように一斉に同じ方

向を睨む。
「風牙？　まさか……」
尋ねる舞に、風牙はある方向を睨み据えたまま首を縦に振る。
『ああ、ガルドだ！』
『だが少し距離があるな……数ははっきりと分からん』
風牙に続き、翔炎が情報を付け加える。それを聞き終わる前に、健はエプロンを外して、店の出入り口へ足を向ける。
「化物が出たらしい。行ってくる！」
そう家族へ告げて上着を掴む健。その背中を見て悠樹、舞、渉が椅子を蹴って立ち上がる。
「待てよ、健！　俺も行くぜ！」
「私も！」
「僕も行きます！」
三人の声に足を止めて振り返る健。
「けど、皆はこっちにバイクを持って来ては……」
そんな健の言葉を、いつの間にかパートナーの隣りに並び浮かんでいた翔炎が遮る。
『バイクならあるぞ。免許だのなんだのを問題にしないとびきりの奴がな』
そう言う翔炎の横で、悠樹が眉根を寄せて苦虫を噛み潰したような顔をする。
「アレを使うのは気が進まねぇけど……そのことについては大丈夫だ、問題ねぇよ」
苦り切った顔のままため息をつく悠樹。その横では、舞と渉も同じように渋面を作っていた。
「アレ、かぁ……」
「やるしかないのか」
事の前から疲れ切った雰囲気を醸し出しながらも歩き出す悠樹たち。そんな高校生たち三人に軽く首を傾げながらも、健は先導する形で再度出口へ歩を進める。

「ぎゃあああああああああッ！？」
「ちょ、ちょ、ちょッ！？　なんで、ここで加速ゥッ！？」
「わ、わ！？　うわぁッ！？」
恐怖の悲鳴と鋭いエンジン音の尾を引いて、夕日に染まった川辺の道を駆け抜ける四台のマシン。その先頭を行く、赤い二つのヘッドライトを持つ黒いフルカウルのスポーツバイク、マシン・オーバーカム。その上に跨る仮面ライダーリバースは、ミラー越しに後ろに続く赤、翠、水色のライダーたちを見る。
「近いッ！？　地面が近いッ！？」
火の一字が刻まれた風防とモノアイ状のヘッドライトを持つ、赤と黒のスポーツネイキッドバイク火翼。カーブに沿って大きく傾いた車体。その上で烈火は、近づく地面から赤い仮面を逸らして悲鳴を上げている。
「転ぶ！？　転んじゃうッ！？」
半ば泣き出しそうな声を上げる烈風を背に乗せて、素早く立ち上がるヘッド部に風の一字が刻まれた翠と白のバイク風車。
「もう……とにかく早く着いて欲しい」
氷の一字を持つ水色のバイク、吹雪を的確に操作しながら、諦めの溢れた声で呟く烈氷。
上がり続ける悲鳴とは裏腹に、正確な運転を続ける三人。その様子を見ながら、リバースは心中で呟く。
『皆が嫌がっていたのは……こういうことか。体が勝手に操作しているみたいだけど、意思と離れすぎたら万が一のことも起こりかねない！』
リバースは愛車を減速させ、火翼と少し離れた位置で並走させる。そしてマシンへしがみつくようにハンドルを握る三人へ向けて、走行中でも届くように声を張り上げる。
「三人とも！　まずは前を見てッ！」

すると三人は関節の錆ついた人形のようにぎこちなく首を巡らす。自身に集まった六つの目に、リバースは続けて声を投げ掛ける。
「自分の進む方向、体が進ませようとする方向に意識を向けてッ！体が勝手に動くなら操作は任せて！」
「そ、そんなこと言われてもッ！？」
悲鳴交じりに叫ぶ烈火。その刹那、前方から逆走してくる黒い巨体が姿を現す。
「クッ！」
「うぉわぁっ！？」
とっさに左右に散開し、突撃をやり過ごすリバースと烈火たち。すれ違う瞬間、両足の無限軌道でアスファルトを踏みつぶして走る２m超の巨体の正体、脇の下から伸びた大砲を抱える牛のガルドと視線が交差する。
「何だ！？　あのガルドッ！？」
まるで戦車と一体化したかのような異様なガルドの姿に驚きの声を上げる烈火。その間にガルド・バッファローターンクは路面を削りながら方向を切り返す。そして大きく膨らんだ鼻から息を吐きだすと、背後からこちらを追い立て始める。
「機械化したガルド！？　って、あの大砲……ッ！？」
烈風が息を呑んだ瞬間、ガルドが両脇に抱えた大砲が轟音を上げて火を噴く。
「ウッ！？」
着弾と共に巻き起こる爆発と煙。立て続けに放たれる砲撃。車体をあおる爆風の中、愛車のハンドルを切って砲撃を掻い潜るリバース。ミラーに映る戦車と融合したガルド・バッファローの姿に、リバースはかつて戦ったブルーローズの怪人たちを思い出す。
「グ！？　あの武装化……まさかブルーローズの生き残りが関わって……ッ！？」
「どういうことですか！？」
砲撃から逃げる吹雪に振り回されながら、烈氷が叫ぶ。そこへ火

翼に跨った烈火がアスファルトに爆ぜる砲撃に追い立てられるようにして近づく。
「話は後だ、渉ッ！　今はあいつをッ！！」
烈火がそう言うや否や、車輪に旋風を纏わせた風車が、烈風を乗せて三人の少し前に着地する。
「わっ！？　……もう！　どうせ勝手に走るならッ！！」
風車が走るのに任せ、烈風は一枚のチップを右腕にセットする。
《Ｗｅａｐｏｎ……Ｃｙｃｌｏｎｅ　Ｓｈｏｔ》
そして呼びだした風の拳銃を握り締め、後ろへ向けて引き金を引く。途切れることなく鳴る銃声と共に放たれる風を固めた銃弾。それはライダーらの背後へ迫っていた砲弾と正面からぶつかり合い、爆炎の壁を作る。
「皆！　俺が奴の動きを止める！　そこへ一気に畳みかけてくれッ！！」
「健さん、何をッ！？」
慌てた様子の烈風には答えず、リバースは両足を揃えてシートを踏み、四肢のバネを同時に使って跳躍。
「セェアッ！！」
垂直に飛翔したリバースは頂点を背中から乗り越え、戦場となった道路を見下ろす形で降下する。落下しながら、その赤い双眸は爆炎の壁へ突っ込もうとするガルド・バッファローの頭を睨み据えている。
「セェイィヤアアアアアアッ！！」
そしてガルドが壁をぶち抜いて砲を構えた次の瞬間、リバースの両足蹴りがその脳天を踏み抜く。
「ヴモッ！？」
濁った鳴き声を上げ、白目をむくガルド・バッファロー。その頭上から、リバースは蹴りの反動に乗って再び跳ぶ。直後、炎と氷の礫と風の弾丸が、前のめりに傾いたガルドの体へ立て続けに叩きこまれる。

「ヴモォオッ！？」
そしてガルド自身の砲撃の暴発により、大きな爆発が巻き起こる。その爆発の中、煙の尾を引いて投げ出される黒い巨体。リバースはそれを目で追いながら着地。そこへバイクを降りて駆け寄ってきた烈火たち三人と頷きあい、吹き飛んだバッファローを追う。
道路を外れ、遠くにバスが数台停まった広い駐車場へ転がるガルド・バッファロー。右の砲を失い、うつ伏せに倒れもがくそれへ追撃をかけようと走る四人。その足元に銃弾が撃ち込まれ、火花が壁を作る様に立ち上がる。
「クッ！？」
「うわ！」
とっさに足を止め、片腕をかざして身を守るライダーたち。
「どこから……！」
かざした腕を下げ、視界を開けるリバース。すると立ち上がろうとするガルド・バッファローを守ろうとするように、ガルド・アントらが集まってきている。
「またアリのガルドか……」
『だが、私たちが戦った奴らとは違うぞ……』
腕が銃になっている者、剣や斧、槍といった得物を携えた者など、様々な武装を供えたガルド・アントたち。その姿を見て嫌悪感の籠った舞の声と警戒心を籠った風牙の声を漏らす烈風。
身構える四人のライダーに対し、武器を構えるガルド・アントの集団。
「……ぁぁぁぁあああッ！？」
その瞬間、遠くから徐々に近づく少年の物らしき悲鳴と、鋭いエンジン音が響く。
「これは……ッ！？」
「……あいつか」
「多分そうなのだよ」
「意外に早かったかな」

声のした方角へ目を向けるリバース。その一方で声の主の正体を察してか、軽く息をつく烈火たち。すると、青い目を持つ虎を模した仮面の黄色い戦士を乗せた黄色いバイクの姿がリバースの視界に入る。
「ぎゃあああああああああああッ！？」
悲鳴の尾を引いて、電光の奔るタイヤでアスファルトをスパークさせ、尻を振って走り回る黄色いバイク。やがて雷のバイクはガルド・アントの一群をボウリングのピンのように跳ね飛ばし、その上にしがみついていた黄色いライダーを宙へ投げ出して停止する。
「ぶるぅあああああああああああッ！？！」
顔面と地面を擦り合わせながら、四人のライダーたちの許へ滑り込む黄色のライダー。その背中を見下ろして、烈火が呟く。
「やっぱりミスターおバカの小野川と……」
『烈雷の対異形戦闘用バイク、迅雷だったな』
翔炎の物も交えた呟きに続き、烈雷のバイク、迅雷が轟く稲妻と共に消え失せる。
「き、キミ、だいじょう……」
「だあああああッ！？」
リバースが助け起こそうとした手が届くよりも早く身を起こす烈雷。そして微かに煙を上げる顔を烈火のそれにぶつけんばかりの勢いで近づける。
「波ァァ賀ァァァァァァッ！！　合流してまずミスターおバカってどういう意味だコラァッ！？　ここは普通無事で良かったぁ、とか言うところだろォォォォッ！？」
泣き声交じりに烈火へ掴みかかろうと手を伸ばす烈雷。烈火はそれを払いのけ、そのついでに足を払う。
「ぉろばふ！？」
再度アスファルトの地面と熱烈にキスをする烈雷。だがすぐさま身を起こすと、今度は烈風へ縋るように手を伸ばす。
「舞すわぁぁん！　せっかく暴走バイクにしがみついて駆けつけた

のに、波賀がひどいよォォォォッ！！」
　プルプルと伸ばした指先を震わせる烈雷。それに対し、烈風は銃で右肩を叩きながら軽く首を傾げる。
「んー……そうでもないと思うのだよ？　小野川君だし」
「舞すわぁぁぁんッ！？」
　烈風からのつれない返事にその場に崩れ落ちる烈雷。そこへ烈氷が水色の装甲をつけた手を差し伸べる。
「おぉ……渉ぅぅぅぅ。お前だけは、お前だけはぁぁぁぁぁ」
　そして烈雷が手を取ろうとした瞬間、烈氷は伸ばしていた手を素早く引っ込める。
「ぁろまッ！？」
　そしてまたも顔面から倒れる烈雷。それを見下ろして、烈氷が腰に手を当てて首を横に振る。
「学習能力ないね、さすがは小野川君」
『お前らいい加減にしろやコラァッ！？』
　烈雷から融合している精霊、爪雷の怒声が上がる。それとほぼ同時にライダーたちへ向けて一斉に銃弾が放たれる。
「セアッ」
「ハッ」
「はいッ」
「それッ」
　しかし迫る銃撃をライダーたちは素早く反応し、マフラーや炎、風の銃弾、氷の飛礫でそれぞれ相殺する。そしてこちらを殺気だった目で睨んでいる３０体ほどガルドの集団を見据えて、リバースが四人揃った異世界のライダーたちへ声をかける。
「再会を喜ぶのはお預けだね」
「このバカは別にいいんだけどな」
　呟きながらホルダーからチップを取り出す烈火。それにならって烈風、烈氷も一枚のチップを取り出す。そして烈雷も仮面越しに顔をさすりながら両足で立ち上がる。

「ところで、誰？　こいつ？」
そしてリバースへ目を向けて、仲間たちに尋ねる。烈火たち三人の溜息が洩れる中、リバースは肩越しに烈雷へ顔を向ける。
「仮面ライダー、リバース。よろしく烈雷君」
リバースは言い終るや否や、正面のガルド集団へ視線を移し、武器を構えて迫る黒い集団へ向けて駆け出す。
「改めて、開戦と行くかッ！」
《Ｗｅａｐｏｎ……Ｔｗｉｎ　Ｂｌａｄｅｓ》
「まかせてくれたまえよ！」
《Ｈｏｍｉｎｇ　Ｓｈｏｔ》
「うん、行こうか」
《Ｗｅａｐｏｎ……Ｉｃｅ　Ｈａｌｂｅｒｄ》
それぞれに手に持ったチップをセット。烈火は炎の双剣、烈風は誘導弾モードへ切り替えた風の銃、烈氷は氷の鉾槍を構えて走り出す。
「ちょぉ！？　おい！　俺を置いてくなぁぁぁッ！！」
《Ｗｅａｐｏｎ……Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｃｌａｗ》
そして烈雷も慌てて雷の鉤手甲を装備して走り出す。
銃の腕を持つガルド・アント、ガンアントの銃撃と烈風の放つ風の誘導弾がぶつかり合い、火花を散らす。降り注ぐ火の粉が装甲の表面で弾ける中、リバースは剣を振り上げて迫るガルド・アント、ソードアントへ左拳を叩きこむ。
「セェ！　アッ！？」
胸を撃つ一撃に剣を取り落とすソードアント。間をおかず、その巨大な複眼の合間へリバースの赤い拳が突き刺さる。そこへリバースの脳天を狙った槍の穂先が迫る。
「フッ！」
リバースは鋭く息を吐き、しなり迫る槍の柄を左手で掴んで引き寄せる。そして前のめりに姿勢を崩したスピアアントのこめかみを右爪先で叩く。

「ギギッ！？」
「セアッ！」
その蹴りでガルドの槍を握る手が緩み、リバースはすかさず槍を奪い取って、その石突を突き出して傾いたガルドの体を突き飛ばす。くの字に折れて飛んで行くそれを尻目に、体を切り返すリバース。そして眼前へ迫っていたアックスアントの斧を、横にした槍の柄で受け止める。
「イィヤッ！！」
斧を引く間も与えず、鋭い気声と共に腹を蹴り、続けて柄を跳ね上げる。すかさずカヌーを漕ぐ様な形で槍を振り、柄の部分での連撃を叩き込む。
さらに追撃をかけようとリバースは槍を握る手に力を込める。だがその瞬間、背後から覆いかぶさった影にその場を飛び退く。
次の瞬間、轟音と共にリバースが踏んでいたアスファルトが砕け散る。右拳で舗装された地面を砕いたガルド・バッファローは、右拳をつき立ててまま左脇の大砲をリバースへ向ける。
「チィッ」
リバースは舌打ちと共に槍を投げつけ、横へ飛ぶ。槍投げによる牽制で照準がずれ、直撃は避けたものの爆ぜる風と熱がリバースの身を煽る。着地と同時に二度、三度と横転し、その勢いのまま起き上がってブレーキをかける。だがそこを狙い、バッファローの砲門とガンアントの銃が一斉に向けられる。
「行くぜ行くぜェェェェッ！！」
その瞬間気合の漲った叫びと共に、両腕の爪を振り上げガルドへ突撃する烈雷。行く手を阻むソードアントをその剣ごと右、左、回転して右と連続で爪を振るって引き裂いていく。そしてアリの怪物を蹴散らした勢いのまま、ガルド・バッファローへ右の爪を突き出す。
「よお、リバースって言ったな！？　こっからはこの俺、小野川海斗のクライマックスタイムだ！！　この牛ヤロー、ガルド・ビーフ

をすぐにバラバラにしてやるぜッ！！」
突き出した爪とガルドが盾にした腕を競り合わせながら、自信満々に言い放つ烈雷。
「おい小野川。ビーフは牛肉だぞ？　生きてる牛はビーフとはいわねえ」
烈火がそう言って、飛び込み様にガンアントの銃を左の剣で切り落とし、逆の剣で左脇から斜めに切り上げる。そして続けて手近なガンアントの首へ左の剣を突き刺す。
「そのまま食べるつもりなの？　小野川君、へんた～い」
軽い調子で言いながら、こちらへの援護射撃の為に引き金を引き続ける烈風。その脇を狙って突き出される槍。それをその場で回転してかわし、持ち主の顔面へ銃口を向け、風の銃弾を放つ。そして仰け反ったスピアアントの胸を踏み台にして飛び上がり、身を翻して逆側から迫っていたアックスアントの顔を蹴りつける。
「そのままお腹もクライマックスにしちゃえば？」
そして烈氷も慣れた調子で罵りながら、ハルバードの穂先でアックスアントの腹を突き、後ろから迫っていたソードアントの剣を装甲で受け止め、穂先つけたガルドを切りつけてきたガルドへ横薙ぎに叩き付ける。
「い、今すぐ肉に変えるから問題なくね！？　あとガルドなんか食わねぇからぁぁぁッ！？」
叫び、右の爪に力を込めて押し込む烈雷。だがその背中を目がけ、スピアアントが槍を脇に抱えて突進してくる。
「烈雷君、危ないッ！？」
右手側のアックスアントの手首を取り、その腹へ膝蹴りを叩きこみながら警告するリバース。
「へんッ！？　こんな雑魚ガルドにやられるわけが！」
余裕の言葉と共に背後へ左の爪を振り上げる烈雷。だが、槍の穂先と鉤爪の先端が触れ合った瞬間、鉤手甲はパリパリと音を立てて空へ散る。

「はぁ……ッ！？」
烈雷から驚きの声が漏れるや否や、槍の穂先は烈雷の脇腹を捉える。
「おぐあ！？」
「ヴモォッ！！」
その痛みに力が緩んだ刹那、ガルド・バッファローは腕を振り上げて烈雷の顎へ掬いあげるように拳を叩きこむ。
「ッ！？　オーバーカムッ！！」
顎を上げ真直ぐに上昇する黄色のライダー。その姿を見上げてリバースが相棒の名を叫ぶ。するとそれに応えるように、車輪を輝かせたオーバーカムが唸りを上げて空を駆けてくる。
「セェアッ！」
両足を揃えて跳び、空を踏んで走る愛機へ跨るリバース。そして上昇の速度を緩める烈雷を見上げ、スロットルを捻る。
光の道を残して昇るオーバーカム。そして上昇の頂点へ達しようとする烈雷を斜め下から掻っ攫う。その直後、オーバーカムの背後を砲撃が通り過ぎる。
「大丈夫か、烈雷君？」
「お、おお……助かったぜ」
烈雷は頷きながら、身を翻してオーバーカムのタンデムシートへ跨る。リバースはそれを肩越しに一瞥し、下から撃ちあげられる砲撃に車体を切り返す。
「のおわッ！？」
「落ちないでくれよ！？」
急制動に背後から上がる驚きの声。その主に一声かけて、リバースは上体を車体に密着させ、ハンドルを切って逆側へ車体を切り返す。
砲撃を掻い潜りながら地面を目指すリバース。その中で、リバースは銃撃に晒される烈氷の姿を見とがめ、烈氷に集中砲火を浴びせるガンアントの一団へ向けて急降下、それを愛車の機首で撥ね飛ば

す。
「渉君、無事かい！？」
そしてその勢いのまま烈氷の側へ横滑りに滑り込み、甲羅をに籠る亀のように身を固めた烈氷へ声をかける。
「何とか……あのガルドの攻撃、風属性ですね……」
左肩を右肩で抑えて苦しげに答える烈氷。
「渉何言ってんだよ？　あの槍は俺にあり得ねえくらいキいたぜ？　じゃあ風じゃねえよ、何故なら俺と舞さんの相性は……」
「寝言は寝て言ってくれるかな？　何なら今ここで寝かせてあげるよ？」
皆まで言うことを許されずに切り捨てられ、うなだれる烈雷。
リバースはオーバーカムに跨ったまま、迫りくるソードアントの剣の持ち手と胸へ右の蹴りを叩きこみ、烈氷に視線を向ける。
「どう見る、渉君？　俺は武器が鍵になっていると思うけれど……」
「僕も同感です。原理はともかく、あのアリのガルドたちは持っている武器で属性を変える……」
そこで烈氷は一度言葉を切ると、その目をリバースへ向ける。
「僕に考えがあります。僕が動きを止めますから、その間に伊吹さんはバッファローを仕留めてください。後ろに乗ってるのは武器にして構いませんから」
そう言って烈氷の指し示した後部座席を一瞥し、リバースは首を縦に振る。
「分かった。頼むよ、渉君」
リバースは愛車のスロットルを捻り、顔を上げる。そして、斧の一撃から転がり逃げながら敵を切り裂いていく烈火と、空中で身を翻し射撃を続ける烈風へ向けて叫ぶ。
「これから渉君が仕掛けるッ！！　舞ちゃんは銃と槍を持ったガルドを牽制して、渉君の大技が決まったら悠樹君は銃持ちを優先して蹴散らしてッ！！」
「分かった！」

「やってみるのだよ！」
リバースの飛ばした指示に、烈火と烈風からの鋭い声が返ってくる。それを受けてリバースと烈氷は頷きあい、烈氷は腰のホルダーから一枚のチップを取り出す。そして烈氷はそのチップを右腕にセットする。
《Ｆｉｎａｌ　ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｈｈｙｏ》
その電子音声と共に、烈氷の両手の上に無数の氷弾が浮かび上がる。そして烈氷はその氷弾を周囲へばら撒く。
「みんな、跳んでッ！！」
直後、鋭い声で合図を飛ばす烈氷。それに従い、烈火、烈風が跳躍。リバースがオーバーカムで空へ駆け出す。それを見届け、烈氷は右手に残った冷気の塊を渾身の力を込めて地面へ叩きこむ。
輪を描いて広がる凍気。それがばら撒かれた氷弾に触れ、次々と爆散。連鎖的に弾ける凍気の嵐に、周辺のガルドが氷の中へ飲み込まれていく。
吹雪が散り、乱立するガルドの氷像。その中の一際大きなものに向けて、リバースはオーバーカムの機首を切り返す。
「うお！　寒ぅッ！？　って、なんじゃこりゃあぁぁぁぁッ！？」
身を震わせ、顔を上げて叫ぶ烈雷。後部座席へ跨る彼に、リバースは真直ぐに凍結したガルド・バッファローを見据えたまま声をかける。
「今からあのバッファローのガルドに仕掛ける！　頼むよ、烈雷君？」
「お、おお！？　って、ちょっと、速い！　速いってェェェッ！！」
ガルド・アントの氷像が砕け散って行く合間を縫い、低空を駆け抜けるオーバーカム。その目前で凍結したガルド・バッファローの身が震え、自身を覆う氷を弾き飛ばす。だが次の瞬間、そのがら空きの鳩尾へオーバーカムの機首が突き刺さり、凍りついた足を砕いて宙へかちあげる。
「セェアッ！！」

すかさず宙舞うガルドを睨み、シートを踏んで跳躍するリバース。そして上昇を続けるガルドを追い越すと、リバースは左腰のバックルを右腕に取りつける。
《Ｆｕｌｌ　Ｏｐｅｎ》
「烈雷君ッ！！」
渦を巻くエネルギーに覆われた右拳を振りかぶるリバース。そしてエネルギーの迸る拳を、ガルドの分厚い背中へ叩きこむ。
「ライダー……パンチッ！！」
技の名を告げると同時に爆ぜる衝撃。それに押されて、ガルドの体は烈雷の居る方向へ高速で落下していく。
「おっしゃあ！　この技で決めるぜッ！！」
『よし行けェ！　海斗ォッ！！』
降って行くガルドを見上げ、精霊と揃って気合十分の声を上げる烈雷。そして腰を落とし、一枚のチップを右足のリーダーへセット。
《Ｆｉｎａｌ　ａｔｔａｃｋ……Ｒｅｔｕｒａｉ》
その電子音声と共に、烈雷の右足が金色の雷を放つ。烈雷はその放電の勢いに乗る様に跳躍。上昇の途中で身を翻して足を上に向けて突き出す。
「ひぃっさぁつッ！！　お・の・が・わ・パァァァァンチッ！！……って、また間違えたぁぁぁぁッ！？」
漲る気合に乗せて放たれた蹴り技、正式名称落雷一衝。その一撃はガルド・バッファローの鳩尾に風穴を開け、爆散させる。
片膝をついて着地し、赤熱したクラッシャーから熱気を吐きだすリバース。それに続いて烈雷も左膝をついて着地する。そこへ烈火、烈風、烈氷が各々に体を解しながら歩み寄ってくる。
「また間違えたね、小野川君。あ、健さん早くこっちに。馬鹿がうつります」
そう言ってリバースへ手招きする烈風。
「小野川君はもう隔離しようか。伊吹さんしっかり消毒した方がいいですよ」

烈雷を視野に入れないようにして、烈風に続く烈氷。
「違えって！？　あるだろ！？　間違えないようにって思ってたら同じ間違いしちまうことってぇぇッ！？」
一定以上の距離に近づこうとしない仲間たちに歩み寄って、必死に弁解する烈雷。対する烈氷と烈風、そして烈火は近づいた分後ずさる。
「小野川……お前、健がせっかく格好いい流れで譲ってくれたのに、最悪だな？」
「波ぁ賀ぁぁぁぁぁぁッ！！」
両腕を振り上げ怒声を上げる烈雷。
そんな四人の掛け合いを見て、リバースは思わず笑い声を零す。
「ハハ……キミたち仲いいなぁ」
リバースのその言葉に、四人が一斉にこちらを見る。
「ドコがだよッ！？」
「ないない、ないですって健さん」
「嫌だなぁ、冗談きついですよ」
「いやマジで小野川と仲いいとか、冗談じゃねえ」
そんな四人の反応に、リバースは溢れ出しそうになる笑いを抑えながら、腰のバックルへ手を伸ばす。だがその瞬間、四人の向こう側に影が揺らめき、一人はなれた烈雷へ黒いエネルギー塊が迫る。
「危ないッ！！」
「は？」
とっさに駆け出し、呆けた声を上げる烈雷を抱えて倒れ込むリバース。するとその背中を蠢くような痛みと熱が撫でて行く。
「ぐあああああッ！？」
「健！？」
「健さんッ！？」
「伊吹さん！？」
口々にリバースの本来の名前を呼びながら駆け寄る三人。そんな三人の声を聞きながら、リバースは痛みにクラッシャーを食いしば

りながら真正面を見据える。
　そこに居たのは黒いボディスーツを身に纏い、その上にくすんだ紫色の装甲を纏った人型。胸の装甲には金色の鋭い牙の並んだ口のような意匠があり、腕や脛にも同じく金色の牙の並ぶ口がある。黒く大きな目のある頭と両肩には羊の物に似た太く大きな巻き角が備わっている。そしてその腰にある漆黒のベルトには「餓」の一字が刻まれている。
「こいつ……！？」
　こちらへ悠然と歩み寄る乱入者、その姿に絶句する烈火。
『俺たち以外の精霊のライダーだと……ッ！？』
　細部に歪さこそあるものの、その姿はあまりにも烈火たちに似通っていた。

Ｃｈａｐｔｅｒ４（前書き）

読んでくださっている皆様、お気に入り登録してくださっている皆様、ありがとうございます。

当初の予定より大分エピソードが小分けになっています。このままの配分ですと６まで行きますね。

今回もお楽しみいただけましたら幸いです。

Chapter4

「なんなの……こいつ？　ねえ、風牙！？」
一歩一歩悠然と近づいてくる「餓」の一字を持つ紫のライダー。烈風はそれへ銃を向け、背を焼かれたリバースを助け起こしながら、融合している風牙へ尋ねる。
『私にも分からんッ！　こんな奴は見たことも聞いたこともないッ！？』
どこか取り乱した調子で応える風牙。対して身を起こした烈雷が、仮面越しに鼻先を指で弾くような仕草をしてホルダーからチップを取り出す。
「撃ってきたってことは敵だろッ！？　今度こそ汚名挽回に、いくぜぇぇぇぇッ！！」
《Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｓｔｒｉｋｅ》
仲間たちが言葉の間違いにツッコむ間もなく、拳に雷を漲らせて走り出す烈雷。対する巻き角を生やしたライダーは足を止め、左腰のホルダーから一枚のチップを摘み出す。
「うらぁッ！」
そこを目がけ烈雷が雷光を纏った右拳を振り下ろす。だが紫のライダーは左へ半身を引いてそれを避ける。
「このッ！」
追撃に繰り出す左掌低。それも上体を反らした謎のライダーにかわされる。
「飯の時間だ」
《Ｅｎｅｒｇｙ　Ｅａｔｅｒ》
その瞬間、巻き角のライダーが呟き、左手から離れたアタックチップを右腕から伸びた口が噛む。同時に烈火たちの物に比べて低い声での電子音声が鳴り、謎のライダーの両腕に炎の様に揺らめく闇がまとわりつく。

「おらあッ！？」
烈雷が吠えて横薙ぎに左裏拳を振るう。それを軽く飛び退いてかわす紫のライダー。地を踏んだ瞬間を狙い、裏拳の勢いを乗せた右の拳を突き出す烈雷。だが雷を纏ったその拳は、巻き角のライダーの右手に受け止められる。刹那、その手を覆う黒い炎が烈雷の腕を飲み込む。
「なにいいいッ！？」
腕に噛みつき、雷を喰らっていく闇へ驚きの声を上げる烈雷。そこで掴まれた腕を引かれ、鳩尾へ膝が叩きこまれる。
「がっ……はッ！？」
体をくの字に折り、痛みに声を漏らす烈雷。その喉を謎のライダーの左腕が掬いあげるように握り、吊り上げる。
「烈雷君ッ！？」
その烈雷の姿に、背中から煙を上げたまま走り出すリバース。
「おい健ッ！？　行くぞ霞河、渉ッ！！」
「ちょっと、悠樹君！？　健さん！？」
「やるしかないよ、霞河さん」
烈風の返事を待たず、両手から炎を噴き出して、リバースを追う烈火。走る間に両手から伸びた炎は一対の剣へと変わる。
剣を握る手を翼のように広げ走る烈火。その横を風の弾丸が追い抜き、吊り上げた烈雷へ闇の牙を突き立てている紫のライダーへ四方八方から襲いかかる。だがその弾丸は半分は右腕の闇に食われ、もう半分は烈雷を盾に防がれてしまう。
「アガッ！？」
烈雷の背に火花が弾け、声が上がる。そして紫のライダーは盾に使った烈雷を、左側から迫るリバースへ向けて投げつける。
「クッ！？」
リバースは足を止め、飛び込んでくる烈雷を両腕で抱き止める。その隙に迫る烈雷越しの蹴り。それにリバースは、抱きとめた烈雷を持ち上げ、自身の胸部装甲で蹴りを受け止める。

「ぐ、ふゥッ！？」
紫の左足がリバースの胸の装甲を砕く。その衝撃でリバースの両足が浮き、抱えあげた烈雷もろとも押し飛ばされる。
「健さん！？」
「伊吹さん！？」
「健ッ！？」
それでもなお烈雷を庇い、背中から倒れて地面を滑るリバース。
『悠樹！　集中しろッ！？』
相棒の声に我に返り、視線を移す烈火。その眼前には闇に覆われた腕を振り上げた謎のライダーが迫っている。
「クッソォッ！」
眼前へ迫る餓獣の口にも似た右手へ、烈火は左手の剣を振り下ろす。だがその刃は揺らめく闇に覆われた右手に掴まれ、一瞬で丸呑みにされる。
「なッ！？」
驚きの声を上げながらも、左手の剣を手放し、右足で巻き角のライダーに蹴りを入れて間合いを取る烈火。そして着地と同時に右腕にチップを装填する。
《Ｗｅａｐｏｎ……Ｈｅａｔ　Ｓａｂｅｒ》
その声と共に右手に握ったツインブレイズの片割れが炎の塊へと変わって伸びる。
「おぉらぁッ！！」
その炎の切っ先で地面を焦がしながら、左斜め上へ向けて切り上げる烈火。
だが剣を握る右手首を左拳で叩かれ、続けて右ひじが烈火の鳩尾へ突き刺さる。更に紫のライダーの頭から伸びる角から雷が迸り、烈火の顔面へ真正面からぶつけられる。
「ぐぅッ！？」
弱点属性の威力を上乗せした頭突きを受け、大きく仰け反る烈火。その胸へ闇の中から雷を閃かせた右拳が突き刺さる。

「ぐあああああッ！？」
拳の激突と同時に烈火の胸を電撃が貫き、その身が軽々と宙を舞う。
「悠樹君ッ！？」
「波賀君！？　雷属性なら僕が……ッ！！」
背中から地面にぶつかり跳ねて、うつ伏せに倒れる烈火。倒れた烈火への追撃を防ぐため、謎のライダーとの間に割って入る烈氷。
「ハッ！？」
そして凍気を纏ったハルバードを、巻き角のライダーの、胸目掛け突き出す。だがその突きは左半身を引いたライダーにかわされ、柄を掴まれる。その瞬間、まるで氷を噛み砕くかのようにアイスハルバードが闇に噛みつぶされる。
「そんな……ッ！？」
音を立てて噛み砕かれる自身の得物に驚きの声を漏らす烈氷。それを皆まで言わせず、無造作に振るわれた右腕から吹き荒れた暴風が烈氷を吹き飛ばす。
「うわあああ！？」
「秋元君ッ！？　ハッ！？」
装甲を削り飛ばされながら飛んで行く烈氷を目で追っていた烈風は、弾かれたように顔を敵へ向ける。だがその目の前にはすでに、巻き角を供えたライダーが右手から放った火球が迫っていた。
「あああッ！？」
とっさに左腕を盾にするものの、その防御をも弾き飛ばして炎が爆ぜる。その爆発の勢いに押され、倒れた烈火の許へ吹き飛び、転がって行く。
「霞河……！」
腕を支えに立ち上がろうとする烈火。
「ゆ……悠樹君！」
煙を上げる装甲をそのままに片膝を立てる烈風。そこへ一歩一歩、間を置いて近づいてくる足音。二人がその方向へ目を向ければ、右

手の闇でヒートセイバーを咀嚼しながら歩を進める謎のライダーの姿があった。
「腹が減った、喉が渇いた……」
ぼそぼそと呟きながら、黒い目を爛々と輝かせる謎のライダー。その左手には一枚のチップが握られている。
「足りねぇ、食い足りねぇ……この程度じゃ俺は、暴餓は満たされねぇぇッ！！」
腹の底からの叫び。そして左手のチップをバックルへセットする巻き角のライダー、暴餓。
《Ｒｉｄｅ　ｗｅａｐｏｎ……Ｇａｋｉ》
鳴り響く低い電子音。続いて暴餓のバックルから黒い「餓」の一字が飛び出し、地面に張り付く。「餓」の字は回転の回数が重なり、速度が増す度に大きく広がって行く。やがて回転する文字の上から闇が溢れ出す。そしてその闇をむさぼるように呑み込んで、一台のバイクが姿を現す。
風防に刻まれた「餓」の一字。くすんだ紫と黒のカウルに覆われたボディ。大きな単眼状のヘッドライト。その両脇から前輪を挟むようにして前方へ伸びる二本の巻き角。
「あ、あれはッ！？」
「私たちのと同じッ！？」
「オォアッ！？」
烈火たちの驚きの声が上がる中、雄叫びを上げ、呼びだしたバイクへ飛び乗る暴餓。刹那、二本角のバイクが凶暴な咆哮を上げ、そのタイヤが踏むアスファルトが砕け散る。宙を舞う破片。だがその破片は舞い上がる傍から噛み砕かれる様に消え失せ、バイクの外装がより頑健で棘や牙の伸びる暴力的なものへ変わって行く。
「オ前ラ、マルカジリダァアアアアッ！！」
暴餓が狂気の叫びを上げスロットルを捻る。乗り手の叫びと重なり、吠えるマシン。アスファルトを踏み荒らしながらの突進が立ち上がりかけた烈火と烈風を捉え、その身を宙へ撥ね上げる。

「ぐぅあああああああああッ！？」
「あああうぅッ！？」
苦悶の声を上げ宙を舞った二人。二人が地面に激突すると同時に、その姿が人のそれへと戻ってしまう。
「あっ……ぐぅ！」
「く、ううっ！」
痛みに眉根を寄せ、歯を食いしばりながら顔を上げる悠樹と舞。その目に飛び込んできたのは、角と牙を光らせこちらへ迫る鋼の巨獣の姿でだった。
『立て！　悠樹ッ！』
『舞ッ！　逃げろッ！！』
逃げるよう促す精霊たちの声も虚しく、暴餓とそのマシンの顎が二人へ迫る。
「デェイィヤァァァァァァァァァッ！！」
だが餓えた鋼の巨獣が、今まさに二人を捉えようとした瞬間、紫のマシンの左横腹へ、雄叫びを上げる黒い砲弾が突き刺さる。
アスファルトに火花を散らしながら、悠樹のすぐ傍を走り抜ける暴餓のマシン。その軌道を目で追う悠樹たち。後輪でアスファルトを削り、再度襲い来るために機首を切り返す暴餓のバイク。そこへオーバーカムが再度横滑りに体当たりをかける。
「イィヤァァァァァァッ！！」
「邪魔をするなァァァッ！！」
雄叫びと咆哮、そして鋼の車体が火花を上げてぶつかり合う。
暴餓が振り払おうと突きだした拳を、リバースは頭を下げて潜り抜け、右ひじを反撃に突き出す。それは脇をしめた暴餓の腕に防がれる。だが間髪いれずに右蹴りを繰り出して追撃をかける。しかし暴餓はそれも腕を盾にブロック。
「うざってぇぇぇッ！！」
そして苛立ちに煮え立つ声を上げて、ブロックした蹴り足を跳ね上げて、マシンもろともに体当たりをしかける。

「グ！　イィヤアアッ！！」
体当たりを受けて大きく傾くオーバーカム。リバースは愛車の後輪を振る形で軌道を立て直し、方向を変えようとする暴餓のマシンへ相棒と一緒にぶつかって行く。
その勢いのまま蛇行するマシンに跨り、駆け抜けるリバースと暴餓。その軌道を目で追う悠樹と舞の許へ、烈氷と烈雷が飛び込んでくる。
「大丈夫？　波賀君、霞河さん」
「ああ、何とかな……」
言いながら、悠樹の手を掴み、助け起こす烈氷。その一方で烈雷は舞を起こそうと、咳払いを一つしてその両肩に手を伸ばす。
「ンンッ！　……大丈夫ですか、舞さん。ここからは俺とリバースの兄貴に任せて……」
だが舞は烈雷の手をかわし、悠樹と烈氷につかまって立ち上がる。
「アイツ、本当になんなの？　属性を自由に変えるなんてありえないのだよ」
空振った姿勢そのままの烈雷を背に、暴餓の異常性を呟く舞。
「ちょ、ちょちょ！　無視しないで舞さんッ！？　だからまだ元気ハツラツな俺が、また兄貴とクライマックスブラザーズコンビネーションであの腹ペコヤローを……」
右手を上げ、左手の人差し指で自分の顔を指さして自己主張する烈雷。そんな烈雷の左手首を、不意に水色の装甲を持つ右手が掴み、顔へ押し込む。
「あだぁッ！？　指がッ！？　指がッ！？」
「冗談は頭の中身だけにしようか、小野川君」
人差し指を突き出した左手首を掴み、跳びはねて悶える烈雷。それを冷たくあしらう烈氷。
「渉、テメェッ！　なんてことしやがる！？　あとさりげなく人の脳みそそのものを冗談とか言うんじゃねぇぇぇぇッ！！」
「ああ、冗談じゃねぇよな。本物の馬鹿だし」

「波ぁぁ賀ぁぁぁぁぁッ！！」
悠樹の一言に両腕を振り上げて吠える烈雷。だが次の瞬間、その顔面を烈氷の右手が握りしめる。
「あ、ちょ、渉君ッ！？　いえ、渉様ッ！？　痛ぇ、痛ぇってぇぇぇぇッ！？」
烈氷からのアイアンクローに、泣き喚く烈雷。悠樹はそれを一瞥して、顔の横に浮かんだ自身の相棒、風牙と並んだ舞の順に目配せをする。
「こうなったら、オーバードライブで行くぞ、霞河」
その悠樹の言葉に、舞は翠色のバックルへ変わった風牙を手に取り頷く。
「合点承知なのだよ、悠樹君！」
おどけた調子で言いながら頷く舞。同時に、悠樹の手にバックルに変じた翔炎の重みが降ってくる。
揃ってバックルを腰に取りつけ、腰から一枚のチップを取り出す二人。そのチップは悠樹の物が赤の「翔」、舞の物が翠の「舞」の一字が刻まれたものであった。
《Ｏｖｅｒ　Ｄｒｉｖｅ　Ｓｙｓｔｅｍ……Ｓｔａｎｄｂｙ》
チップの装填と同時にベルトから響く電子音声。そして悠樹と舞の二人は同時にバックルのスライドカバーを右へ引く。
「変身！！」
《Ｌｏａｄ　Ｕｐ》
それに続いてベルトの前に投影される「火」と「風」の文字。それぞれの象徴色の結晶となって弾けた文字は、主の許へ寄り集まり、細やかな亀裂の走った水晶球のように悠樹と舞を包み込む。
やがて赤の水晶球は内から巻き起こる炎に焼きつくされ、翠の水晶球は巻き起こる竜巻によって吹き飛ぶ。炎と竜巻が散り、その中から二つの人影が姿を現す。
赤い装甲に膝や爪先に爪のような部位が現れた足。炎とも翼ともとれる形状へ変わった軽快な鎧。その背中には赤い炎が翼のように

吹きだしている。そして赤い羽根のような部位が広がり、より猛禽のそれへ近づいた顔。仮面ライダー烈火・飛翔形態。
足首に白く鋭い爪の生えた翠色の脚甲。女性らしい緩やかな曲線を描く鎧の背中からは、翠色のエネルギーが鋭く牙のように伸びている。龍のような角がより長く伸びた仮面からは、髪の毛に似た長く白い毛が風になびいて揺れている。仮面ライダー烈風・嵐舞形態。
「渉、援護してくれ。俺達で健を助けてあのヤロウを倒す」
飛翔形態に変わった烈火がそう言うや否や、烈氷の手から脱出した烈雷が前に出る。
「だぁぁッ！！　兄貴を助けるのは俺！　それであいつをカッコよくぶっ飛ばすのも俺ぇぇッ！！」
仲間たちに向けて叫ぶや否や、全身のバネを溜めて跳躍する烈雷。
「まったく、少しは空気を読んでほしいのだよ」
肩をすくめ、嘆息する烈風。
「あのバカには無理な話だろ。とにかく、うまく健とあいつが離れたら攻撃ってことで」
烈火の言葉に烈風、烈氷も首を縦に振り、走り出す。

「セェアッ！！」
リバースが右手に溜めたエネルギーが拳を突き出すと同時に飛ぶ。それを食おうと暴餓の左腕が逸れた刹那、空いた左脇へ拳を叩きこむ。
「ぐ！？　アアッ！？」
苛立ち混じりに突き出された肘を腕でブロック。押し退けると同時に右蹴りを反撃に繰り出し、肩を蹴りつける。さらに追撃に右踵を突き出そうと膝を曲げるリバース。
「おぉりゃあああああッ！？」
そこへ前方から叫び声が横殴りの雨のように叩きつけられる。それにリバースと暴餓が揃って顔を前に向ける。その瞬間、暴餓のマ

シンの目の前に飛び込んできた黄色い塊がマシンの機首に激突する。
「のわばッ！？」
「烈雷君ッ！？」
珍妙な悲鳴を上げて暴餓の頭上へ身を投げ出す烈雷。リバースはとっさにその手を掴み、右腕で風に煽られる烈雷を掴んだまま暴餓と並走する形となる。
「テメェから食ってやるッ！！」
「グゥアッ！？」
無理な姿勢での走行に入ったリバース。その右肩に暴餓の左腕から伸びた闇が突き刺さる。肩口から噛みつぶされるような痛みにクラッシャーを食いしばりながらも、リバースは烈雷を掴む腕を放さない。
「あ、兄貴ィィィッ！？」
闇に噛みつかれたリバースの姿に叫ぶ烈雷。そんな烈雷を振り仰ぎ、リバースは僅かに顎を引く。
「俺なら大丈夫だ……それより、脱出は出来るかい」
「お、おお、ちょっと待ってくれッ！？」
そう言って右手で左腰のチップホルダーを探る烈雷。その間に暴餓は右手をマシンのハンドルから放し、取り出したチップを左腕に食わせる。
《Ｗｅａｐｏｎ……Ｂｌｏｏｄｙ　Ｆａｎｇ》
その言葉と共に、リバースの右肩に食いついていた闇が固まり、鋸のように刃のぎざついた鉈へと変わる。その刃は烈雷へ伸びるリバースの腕に添えられ、腕の向きに沿って一気に切り上げられる。
「ぐぅぅッ！？」
腕を切られながらも烈雷を掴む手を放さずに堪えるリバース。続けて暴餓はリバースの右肩に鉈を引っ掛け、切り下ろす。更に右膝から足首に掛けて切り下ろす。
「グ、ウウッ！？」
「兄貴ッ！？」

火花を上げて切られ続けるリバース。その姿を見下ろしながら、烈雷はようやく引いたチップを右足のリーダーへ通す。
《Ｗｅａｐｏｎ……Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ａｎｃｈｏｒ》
その声と共に烈雷の右足が電光に包まれた瞬間、再度リバースの腕が切りつけられ、烈雷が宙へ投げ出される。
「グッ！？　しまったッ！？」
「おぉわあああああああッ！？」
空中で悲鳴を上げながら、烈雷は身を捩り、右足を大きく振って空を蹴り抜く。続けて、その足の先端に取りついた爪が電気の尾を引いて射出。暴餓のマシンのリア部へ食い込む。
「おおおッ！？」
驚きの叫びを上げながら、打ち込んだ爪に引き寄せられる形で空を進む烈雷。リア部分を踏む形で取りついた烈雷。暴餓はそれを一瞥すると、左手に持った鋸鉈を横薙ぎに振るう。
「おおわぁあッ！？」
その一撃を身を反ってかわす烈雷。だがその為にバランスを崩し、そのままバイクから落ちる。
「あ、わ、おわぎゃあああああッ！？」
落ち行く中、烈雷の手はとっさに暴餓のマシンのリア部を掴む。そのまま武装強化した右足をアスファルトに突き立て、踏ん張る。
「ああ！？」
急激に速度を落としたマシンの上で振り向き、苛立ちを乗せた声を出す暴餓。再度剣を振りかぶる暴餓へ、リバースが煙の上がる右腕で肘を打ち込む。
「うぅらあ！！」
その間に烈雷はアスファルトに火花を散らす右足に力を込める。右足が地面へ食い込み、暴餓のマシンの足を止める。次の瞬間、マシンのタイヤが地から離れて空回りする。
「何だとッ！？」
「どおぉっせぇえいやあああああああッ！！」

そして烈雷雄叫びを上げ、驚きの声を上げる暴餓もろとも、そのマシンを放り投げる。
宙を舞う紫のバイク。それを見上げ、烈雷は両の拳を固めてガッツポーズを取る。
「いよっしゃあああああッ！！　どうッスか兄貴！　俺のファインプレーッ！？」
しかしはしゃぐ烈雷の頭上で暴餓のバイクは黒い霧状の闇へ変わり、その中から鉈に凍気を纏わせた暴餓が烈雷の頭目がけ降ってくる。
「烈雷君、上だッ！？」
右足を軸に車体を切り返しながら、烈雷へ警告するリバース。
「へ？　上？」
警告に烈雷が顔を上げる。だがすでに凍気を纏った刃はその眼前まで迫っていた。
《Ａｉｒ　Ｐｒｅｓｓｕｒｅ》
しかしその声と共に放たれた銃弾が暴餓の刃を砕き、その身に火花を散らす。続いて、暴餓を中心にまるで吸い寄せられるような風が吹き、宙にあったその身が烈雷を押しつぶす形で地面へ叩きつけられる。
「ガアアッ！？」
「あわぎゃッ！？」
折り重なる形で、まるで見えない手に押し込まれているかのように地面へめり込む暴餓と烈雷。
《Ｉｃｅ　Ｔｏｗｅｒ》
さらにその上から風に乗って冷気が集い、両者まとめて封じるかのように太い氷の塔が立つ。
しかし一拍ほどの間を置いて、氷柱が底から削られるかのように高さを失い始める。そして残り僅かになった氷を片手に暴餓が立ち上がる。
《Ｗｅａｐｏｎ……Ｒａｐｔｏｒｅ　Ｂｌａｚｅ》

片手に持った氷を握りつぶす暴餓。そこへ足に炎の爪を装着した烈火が上空から飛び込んでくる。
「おぉらぁあッ！？」
左の蹴り爪が暴餓の翳した左腕を掴んで焼く。腕から煙が上がる中、逆に掴もうと暴餓が右手を伸ばす。だが烈火は左足の爪を放してそれをかわすと、牽制の右足爪を振って炎の翼をはばたかせる。
「おおらぁッ！！」
そして空中で身を翻し、一気に暴餓の背後へ回り込むと、蹴爪のついた右の後ろ回し蹴りで暴餓の背中を焼き切る。
「がぁッ！？」
背に三本の炎の筋をつけ、つんのめる暴餓。さらに烈火は左足を突き出し、その背を蹴り飛ばす。
「健ッ！？」
その呼びかけに応じて、リバースがバックルを右腕に取りつける。
《Ｆｕｌｌ　Ｏｐｅｎ》
「セェヤアアアアアッ！！」
右拳にエネルギーの螺旋を渦巻かせ、暴餓を目がけ跳躍するリバース。
「うざってぇッ！！」
暴餓はリバースを睨みつけ、怒号と共にチップを右腕に食わせる。
《Ｆｉｎａｌ　ａｔｔａｃｋ……Ｂｏｕｇａ》
低い電子音声に続き、黒い渦が暴餓の両腕から広がる。
「なッ！？」
「うぐッ！？」
黒い渦に飲み込まれるリバースと烈火。右腕に渦巻くエネルギーを始めとして全身の力を食いつくされ、変身が強制解除。血まみれの健が背中から地面に落ちる。。
「ぐ、うう……！！」
食いしばった歯から呻き声を漏らしながら身を起こす健。周囲を見回せば、同じように変身の解けた悠樹、舞、渉、海斗が目に入る。

そして、肘から両腕を立ててこちらを見下ろす暴餓と目が合う。
「ウ……がッ！？」
だが次の瞬間、突然暴餓が頭を抱えて膝をつく。
「クソったれがァ……！！」
そしてこちらを恨めしげに睨みながら、その身は足元から立ち込める黒い霧に包まれていく。やがて黒い霧が晴れると、そこには暴餓の姿は影も形も残っていなかった。
「逃げたの……？」
膝立ちになって呟く舞。その呟きに、健は右腕を抑えながら立ち上がり、首を横に振る。
「いや……向こうの時間切れで見逃されたと見るべきだね」

スカーレットジョーカーの奥、浅井家の食卓。戦いを終えて戻った悠樹、舞、渉、海斗の四人がそれぞれの相棒と共に食卓に付いている。
「なんだったんだろうな、あいつ。何かしらねぇか？　翔炎」
悠樹はテーブルに右腕で頬杖つきながら、目の前で羽を繕っている相棒に問いかける。すると翔炎は翼を繕う嘴を止めて顔を上げる。
『残念ながら俺にも分からん。こういう話に一番詳しいのは風牙だが……』
翔炎はそう言いながら首を左右に振る。そして舞の前でとぐろを巻いている風牙へ目を向ける。すると風牙は首を持ち上げて目を伏せる。
『すまないが、私にも皆目見当がつかん。爪雷は……知らないか』
その風牙の声に、海斗の頭上で丸まっていた爪雷が、白い傷の走る顔を顰める。
『確かに俺も知らねぇけどよぉ……端っから決め付けられると頭に来るな』
「なぁに、あいつがなんだろうと関係ねぇよ！　今度出てきたら俺

がぶっ飛ばしてやるからよ！！」
　爪雷を頭に乗せたまま胸を張る海斗。その頭上で、爪雷が鼻を鳴らす。
『頭悪いからって端っから考えるのを諦めてんじゃねぇよ』
「ンだとコラァッ！？　じゃあテメェはなんか考えてんのかよッ！？」
　椅子を蹴って立ち上がり、頭上へ手を伸ばす海斗。爪雷はその手をひらりとかわし、海斗の鼻先を通り過ぎざまに尻尾で叩く。
『フンッ！　考える気の無いヤツよりは考えて動いてるぜ？』
　そう言ってかかってこいよと言わんばかりに尻尾を振る爪雷。相棒からの挑発に握りしめた両拳を震わせる海斗。
「コンのヤロォォッ！　ハッ倒してやるッ！！」
　怒声と共に掴みかかる海斗。爪雷は再度その手をかわして、海斗の頭上へ飛ぶ。
『ハンッ！　やってみろや』
　頭上へ浮かぶ爪雷へ手を伸ばす海斗と、それを鼻で笑いながら避け続ける爪雷。そんな暴れまわる一人と一精霊を横目に、舞が口を開く。
「でも、私たち……っていうか、風牙たち精霊の皆と関係があるのは確かだと思うのだよ。私たちのライダーにそっくりだったし」
　その舞の呟きに、今まで黙って甲羅に籠っていた氷甲が顔を見せる。
『……我らの始祖が生み出された時、同時に闇も生まれた。その闇に心は無く、飢えのままに命を喰らい、渇きのままに世界を呑んだ。やがて精霊と人の力によって闇は封じられた……』
　そこまで言って氷甲は口を閉ざす。押し黙る氷甲を呆然と眺める一同。そこから一向に口を開こうとしない氷甲へ、渉がおずおずと顔を寄せる。
「ええっと、そう言う伝説を聞いたことがあるってことで、いいのかな？」

その渉の問いに、氷甲はただ黙って首を縦に振る。
『確かに、その伝説の存在とそっくりだったな』
氷甲の語った伝説の内容を噛み締め、呟く翔炎。
「命を食って、世界を呑む……か」
悠樹は眉根を寄せて腕を組むと、腰掛けた椅子に背中を預ける。
するとそこへ、湯気の立つハンバーグの乗った皿が悠樹たちの前に並ぶ。その手を辿って悠樹が顔を上げれば、口元を穏やかに緩めた健の顔があった。
「お待たせ、俺達も食事にしよう」
「待ってたぜ兄貴ィッ！？　さあぁ、食うぜぇ！！」
食卓に並ぶデミグラスソースの乗ったハンバーグを見て、手をすり合わせて唇を舐める海斗。渉は自分の分の皿を受け取りながら、そんな海斗の姿を半眼で眺める。
「そう言えば小野川君、戦いの途中から伊吹さんのことを兄貴兄貴ってなんなの？」
すると海斗は得意げに胸を張り、鼻の穴をふくらませて自分の胸を右の親指で突く。
「この俺のクライマックス級のパワーを一目で見抜く実力、そしてあのコンビネーションでの息の合い方！　この俺が魂の兄貴と認めたからそう呼んでんだよ！」
自信満々にそう言って、口元に笑みを浮かべる海斗。それを見上げて、舞は眉根を寄せてこめかみを人差し指で突き解す。
「なんだか小野川君が前に戦った茶色い方のバッタライダーに見えてきたのだよ……やっつけてもいいかな？　答えは聞いてないけど」
「ちょ、舞すわぁぁぁんッ！？」
舞の言葉に目を剥いて振り返る海斗。
「手伝おうか？　伊吹さんにも迷惑だろうし」
「おい渉ぅぅッ！？」
海斗は涙目になりながら舞にゴーサインを出す渉へ振り向く。
「ああ、このバカと兄弟と思われたら薫もかわいそうだしな」

「波ぁぁ賀ぁぁぁッ！？」
弾かれたように悠樹へ向き直り、海斗は恨めしげな怒声をぶつける。
そんな四人のやり取りを眺めながら、健は右手の中指で額を掻きながら苦笑を浮かべる。
「俺は別に悪い気はしてないけど」
「兄貴ィィッ！！」
健の声に目を輝かせる海斗。対して、悠樹、舞、渉の三人は揃って右手を立ててパタパタと扇ぐ様に動かす。
「いやいや、健。馬鹿がつけ上がるだけだから」
その悠樹の言葉に続き、首を上下に振る舞と渉。そんな三人へ海斗は空を握りながら顔を向ける。
「お前らぁぁぁぁぁぁッ！？」
海斗が声を上げた瞬間、そのツンツンと逆立った頭が後ろから鷲掴みにされる。その手の主、亮子は僅かに身を屈めて海斗と顔を並べる。
「飯時になってまで騒ぐんじゃないよ。ん？」
「い、イエス・サー……」
反論を許さぬ笑みを向けられ、身を強張らせて頷く海斗。そしてそのまま押し込まれる様に席に着く。
海斗がきちんと坐り直すのに続き、ご飯を盛った茶碗の並ぶトレイを提げて、薫が席に着く。
「さあ、しっかり食べて力をつけな」
席に付きながら一同に声をかける亮子。それに頷き、食卓に付いた面々は揃って手を合わせる。
「いただきます」
口を揃えて食前の挨拶を済ませる一同。同時に海斗は箸を取り、自分の分のハンバーグを大きく捌く。そしてハンバーグの一切れを箸でつまみ、白いご飯の上に余分なソースを落とすと、大口を開けて口の中に放り込む。その瞬間、海斗の眼が輝く。

「うンまぁぁあいッ！！」
満面の笑みを浮かべ、ソースを落とした白飯を掻きこむ海斗。
「それだけ喜ばれると、リクエストに応えた甲斐があったよ」
猛然と夕食を掻きこむ海斗の姿に、笑みを深める健。
夕食が進む中、口の中に入れたハンバーグと白飯を飲み込んで、亮子が思い出したように口を開く。
「ところで、寝床はどうしようかね？　舞ちゃんは薫の部屋でいいとして、男衆か」
その亮子の言葉に、健も噛んでいた物を呑みこんでから頷く。
「そうだね、俺の部屋を使ってもらおうと思うけど、三人全員は厳しいしね」
「じゃあ、居間のソファーと床でも貸してもらうか」
健に続いて悠樹が提案すると、海斗が箸と茶碗を置いて立ち上がる。
「だったらジャンケンで決めようぜ！　勝った順に兄貴の部屋、ソファー、床な！？」
名案を出したと言わんばかりに得意気な海斗。対して渉はそんな海斗へ冷ややかな視線を向ける。
「泊めてもらえるだけでありがたいし、僕は別にどこでもいいんだけど」
「俺も贅沢は言わねえ、全員で居間でいいんじゃねぇか」
渉に続いて箸と茶碗を手放さずに言う悠樹。そんな二人に、海斗は両拳を上下させながら身を乗り出す。
「ノリ悪りぃぞお前ら！？　ジャンケンやろうぜ！！　俺が最下位だったら廊下でもいいからよぉぉッ！？」
そこで海斗は一度言葉を切り、胸を張って右親指で自分の顔を指す。
「ま、いざやったら絶対に俺が兄貴の部屋になるだろうけどな！！」
その海斗の言葉に、悠樹、渉、舞の三人は揃って海斗から身を遠ざける。

「小野川君、どんだけ伊吹さんのこと好きなのさ……さすがに引くよ、ホモ川君」
「うわ……お前、そっちの気があったのかホモ川」
まるで異生物でも見る様な目を海斗に向ける渉と悠樹。それに対して掌を前に出して慌てて否定する海斗。
「ちょ、ま！　お前ら何言ってんだぁぁッ！？　そぉ言う意味じゃねぇからぁぁぁぁッ！？」
そんな海斗へ、健も困ったような曖昧な笑顔を浮かべながら僅かに身を引く。
「えっと、海斗君。俺、ノーマルだから……」
「小野川君へんた～い」
「兄貴ィィィッ！？　舞すわぁぁんッ！？」
健と舞からの一言に頭を抱えて仰け反る海斗。しかしすぐさま復活すると、テーブルに左手をついて、右拳を上下に振る。
「もう！　いいからやろうぜ、ジャンケンッ！？」
そんな海斗に、悠樹と渉は顔を見合わせ、ため息混じりに頷く。
海斗は悠樹たちの反応に身を起こし、右手のグーに左手を被せる。
「よっしゃあッ！！　ジャーンケ……」
そこからジャンプしかねない勢いで膝を曲げる海斗。だがそれを遮って、再度亮子の手が海斗の頭を鷲掴む。
「おいコラ、飯時にバタバタと騒ぐなって言ったよな？　んん？」
「さ、サー・イエッサー……ッ！」
先程よりも笑みを深めての亮子の言葉に、海斗は震えながら食事へ戻る。
なお、食事を終えて改めて行われたジャンケン勝負の結果は、一抜け・悠樹。二番・渉。最下位・海斗という結果であった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3405w/

リバース×烈火　仮面ライダークロスオーバー特別編　暴食の凶精

2011年10月6日03時13分発行